

スペシャルレポート
HCD 2003
【キャンパスへ帰ろう】

【SFC検証】
モラル度最下位って、
どういうこと!?

【When I was young】
有澤誠
大好きな科学をやるために新しい道具

特集
**地域を、
社会を、
やがて世界を
変えるSFC生**

【Co-net】
最新情報の発信源
ファッションエディター 益田史子
株式会社小学館勤務

【異国の風】
優しさと人情の国
セネガル

特集



2

学校と学生の化学反応

—JUMP

4

町にあかりを灯そう

—イルミネーション湘南台

8

茅ヶ崎サザンビーチに現れた夏の寺子屋

—Be Good Cafe湘南

9

人々を巻き込む社会変革の物語

—生活者の社会参加

12

創作活動を通じて人と向き合う

—コトバノアトリエ

14

学生が動かす政治、変える未来

—POPCS

16

湘南台の交差点

—こうさ展

18

カメラがつなぐひとのるつぼ

—湘南市民テレビ局

20

世界を変える!足元から変える!

—孫福弘教授のコメント

22

連載



24 26
28 32

When I was young⑩
有澤誠 環境情報学部教授

24

異国の風⑥
セネガル 小さな村にて
総合政策学部2年 阿毛香絵さん

26

キャンパスへ帰ろう⑦
HCD2003スペシャルレポート

28

Co-net⑨
株式会社小学館勤務 **益田史子さん**

32

SFC検証④
File 04:モラル度最下位って、どういうこと!? **34**

編集後記 **38**

付録 make your campus⑩
ε (エプシロン) 館 研究棟 **39**



イルミネーション湘南台

P.8



JUMP

P.4

やがて世界を変えるSFC生



生活者の社会参加

P.12



Be Good Cafe湘南

P.9



特 集

地域を、社会を、

問題発見と問題解決 —— それは創立当初から一貫して掲げられたSFCの教育理念である。SFC生は講義を聞き、教室で議論するだけでは飽き足りない。自らが直面した問題の解決方法を見出したなら、すぐに実行し、積極的に地域へと働きかけていくのである。本特集ではSFC生の魅力の1つである行動力と、数多くある彼らの活動のうちの8つを紹介する。彼らの活動は常に、「大学と社会はどのように関わるべきか」という問題意識に支えられている。未熟な学生が中途半端に事を起こすべきではない、という見方もある。しかし、何もしなければ何も変わらない。今は手探りで模索している状態であっても、彼らは決して遊び半分でやっているわけではない。真剣に何かを変えようとしているのだ。それぞれの思いを形にしつつ、彼らは、ゆっくりとしかし着実に地域と社会を変えている。やがてSFCを巣立ってゆく彼らは、いつの日か世界を変える主体となるだろう。



学校と学生の化学反応

JUMP

現在急増する外国人生徒のための日本語教室が、ここ藤沢市内にある。

湘南台小学校の先生とボランティア団体JUMPが日々積極的に教室作りに励んでいる。

活動内容は漢字学習指導から多言語教育と幅広い。

地域の学校とJUMPが協力して進める国際理解の現場を垣間見る。

J U M P つ て ど ん な 活 動 ？ 代 表 者 に 聞 く

JUMPの活動の発足は、1992年に遡る。慶應義塾大学SFCで留学生向けの日本語の授業を担当している教授たちが湘南台小学校の日本語教室の存在を知り、その日本語教室が人手不足で困っているという話を聞いた。そこで、大学生に何か手伝いができないかと申し出たことから始まった。当時は、日本の小学校の活動を紹介するビデオ作りを研究会(ゼミ)活動としておこなったのだったが、その後、JUMPは研究会を超えたひとつの団体として独立し、小学校の日本語教室で生徒に日本語を教えることを主な活動とするに至った。以下、JUMPの具体的な活動状況などについて、JUMP現代表の小林司さん(総合政策学部2年)、前代表の西川千紗さん(総合政策学部3年)に話を聞いた。



それはいつ頃から始めたんですか？

西川 2003年の春からです。日本語教室の今津文美先生と話し合って、私たちにできることは何だろうかと考えました。小学校の先生にはできないような授業を大学生の私たちにしてほしいということです。2月頃から私たち自身で授業を企画して、やらせてもらっています。

その内容は？

小林 この前3年のクラスでやったテーマは「国際理解」です。日本人の子供たちには「外国語=英語」という固定観念が染み付いているんです。自分たちの周りには南米の子供たちがたくさんいるのに、彼らの言語に気づかない。そこを埋めようと思ったんです。これからもそういう授業は続けていきますか？

ひとつイベンツとして、日本語教室と一般教室の生徒を橋渡しする役目を担う授業として、ぜひ続けていきたいと思っています。

他に新た企画は出ていますか？

小林 2003年の夏から始めてるのが子供たちのための教材作りです。JUMPと今津先生や他の小学校の日本語教室の先生たちが協力して作っています。あと、日本の生活を紹介するビデオ作りもしています。ビデオ作成ですか。

日 本 語 教 室 の 現 場 で



編集部 (以下、編) JUMPは何人で活動しているのですか？

西川 メンバーのマーリングリストには43人いるんですけど、コアメンバーは約20人です。活動は各自が週に1、2回大学の授業の合間に小学校へ行っています。

編 JUMPに入られたきっかけを聞かせてください。

小林 JUMPに入っている友人が教えてくれて、楽しいと話を聞いて、見学させてもらったのがきっかけです。

西川 私は単純に子供が好きだから。ボランティアをしてみたかった。



編

日本語教室って正規の授業なのですか？

西川 正規授業の取り出し授業という形です。外国人生徒がふつうの授業時間についていけないときに、日本語教室に来て先生や私たちに質問するという仕組みです。

「日本語教室」というのは特別ですよね。他の小学校にあるのですか？ 藤沢市内では6つの小学校と1つの中学校に設置されています。

西川 どの学校でも、教える現場で学生が協力しているのでしょうか？

西川 いや、湘南台小学校のケースは例外的だと思います。

西川 では湘南台小学校に限って学生が協力しているというのは、SFCがあつたからこそと言えますね。活動は楽しいですか？

西川・小林 すごく楽しいですよ。

西川 編 生徒の日本語のレベルはどの程度ですか。

西川 日常会話はまったく大丈夫だけど、授業になると漢字でつまずいてしまうみたいです。

小林 SFCの中中国語を話せる学生を動員して、手伝ってもらいました。

西川 編 去年は、来日したばかりの中国人の子が日本語を全然話せなくて、使っている教材や、教える手順はどうしているんですか？

西川 現段階では、これといった日本語教材のテキストはありません。小学校の方で漢字や算数のプリントが用意してあって、じゃあ今日は漢字をやろうかという流れですね。他のふつうの授業の補足のような具合です。

西川 編 外国人労働者という状況の家庭の子供であるからこそ起きる問題はありますか？

小林 子供の感じ方かなあ。親御さんも日本の常識的な考え方とは違う考え方を持つていて、子供が板ばさみになっているような感じが見受けられますことあります。

西川 編 学校にとけ込みにくかったり？

西川 ええ、所属しているクラスによつても違いますが、日本語教室では明るいのに、自分の本来の教室に戻ると自分を出せなくなる子供がいますね。

日本人の子供の意識を変える

西川 編 子供たちに日本語を教える以外に、どんな活動をしていますか？

西川 日本語教室の子供たちが自分の本来属するクラスで自分を出せなか

小林

ええ、今ちょっと滞っているんですけど。教材のほうでは、算数の問題なんかをビデオと本の両方で作成中です。SFC恒例の七夕祭にも子供たちといっしょに遊んだりもするのですか？

西川 交流会という形で、湘南台小学校で行なわれる文化祭のようなものにJUMPも参加させてもらっています。他にもいろいろ企画はあるのですけど、基本的には、今のところ交流会と教材開発がメインです。

学 生 の 限 界 を ど う 乗 り 越 え る か

西川 編

地域と学生のつながりという観点から向いたいのですが、学生は4年経つと卒業してしまいますよね。地元の人たちからすると、馴染んだと思つたらしくなってしまうという問題もあると思いますが、JUMPに関してはどうなんでしょう？

西川 それは私たちにとっても課題ですね。頑張って引き継いでいくしかありません。

西川 編 10年近い実績の積み重ね、今現在43人のメンバーを抱えているのは、すごいことだと思います。

西川 編 実際JUMPもこの10年の間に人が減つたり、落ち込み気味になつた時期もあったようです。ほんと、最近また盛り上がり始めたなという感じ。

西川 編 西川さんの世代で？

西川 編 その前かな。私が1年の時メンバー十数人。

西川 編 すごく増えたんですね。

西川 編 (小林さんを見て) 「新歓」(SFCでの新入生歓迎会)にも参加したしね。

西川 編 話を聞いた中で、発展段階にある学生団体だからこそみなぎる若々しさ、みずみずしさを強く感じた。JUMPを動かすのは部員達の意欲・心意気であろう。彼らの活動が、湘南台から藤沢市全体へ、そしてやがては日本中へと波及していく日を夢見てみたい。



日本語教室は多くのボランティアの力で支えられている

在日外国人の現状を「知る」「伝える」

日本全国で初めて外国人児童のための「日本語指導学級」(以下、日本語教室)の設置された小学校、それが湘南台小学校だ。現在、藤沢市内には湘南台小学校のほかに、長後小学校、富士見台小学校、大越小学校、侯野小学校、明治小学校、そして湘南台中学校に外国人児童の集まる「国際教室」がある。しかし、「日本語教室」という名前で運営されているのは湘南台小学校だけだ。

その日本語教室に、SFCの学生が組織するボランティア団体JUMPが協力している。

JUMPの母胎となる活動は、1992年にまで遡るが(前ページ「JUMPについてどんな活動?代表者に聞く」参照)、ボランティアサークルとして独立したのは2000年だった。当時のメンバーは、アメリカ合衆国におけるヒスパニック系移民のことやラテンアメリカ地域のこと、また言語学などに興味を持つ学生、日本語教授法を学んでいる学生を中心になっていた。大学でのそれぞの専門分野や得意分野を活かしての活動である。

現在、JUMPのメンバーは交代で湘

面で遅れをとっている外国籍の子どもたちの日本語学習をサポートしている。

しかし、子どもたちへの学習サポートだけが、JUMPの目標ではない。

関東地方、とくにSFCの所在する神奈川県には多くの在日外国人が居住し、さまざまな産業に就いているにも拘わらず、多くの人は、直接彼らを知る機会や情報には恵まれていない。そのため、人々の多くは彼らに対して「顔の見えない隣人」といったイメージを持っているのではないかだろうか。在日外国人とその子どもたちを受け入れる社会にするための基礎づくり。そのため、藤沢地域に住む在日外国人との交流を図り、彼らの現状をまず「知ること」、そしてそれを地域市民に「伝える」ことが大きな活動目標である。

とはいっても、もっとも活発な活動はやはり日本語教室への支援。この活動でJUMPは、自分たちに大きな影響を与えるひとりの先生に出会った。ボランティア活動が必ずしも与えるだけのものではなく、多くのものを得る活動であることを示す好例だろう。

湘南台小学校「日本語教室」にて

湘南台小学校日本語教室の現在の専任教諭は今津文美先生。日々教育活動に奮闘する、熱意に溢れる女性だ。今

日の日本に、外国人児童への日本語教育を専門とする小学校教諭はほとんどいない。実際、今津先生もかつては一般的のクラスを受け持つごくふつうの教師だった。ところがある日、突然の辞令を受け、日本語教室を任されることになった。日本語はともかく、外国语が得意というわけではなかつたこともあり、戸惑いを隠せなかつた。だが、

1年契約という条件付きで日本語教室担当を引き受けた。そんな今津先生だが、日本語教室の2代目の専任教諭として、実は2003年で3年目を迎える。今では生徒たちにすっかり信頼され、外国人児童が不得意とする漢字学習を中心に、効果的な指導を行つていれる。今津先生は、生徒を通してさまざまな文化に触れれば触れるほど、自身の視野が拡がり、興味の度合いも理解の程度もアップしてきたと語る。

JUMPは、自分たちに大きな影響を与えるひとりの先生に出会つた。ボランティア活動が必ずしも与えるだけのものではなく、多くのものを得る活動であることを示す好例だろう。

湘南台中学校に「国際教室」の危機

子供たちは言葉の吸収が早いので、やがて親より日本語を上手に話すようになる。そうすると、親は自分の子供の持つ日本語力に感服し、ついつい全ての勉強が出来るという錯覚に陥ってしまう。そこにつまづきの石がある。子供が中学に進んだときに、しばしば

JUMPの活動は、ここ2、3年で

みんなで作っていく教室

大きくなる。もつとも、学力の上で外国人の生徒が日本人の生徒に差をつけられることが多いのは、小学校と中学校の間の連携の不備によることが多い。いずれにせよ、金銭的に困難な状況にある外国人生徒達の多くが、成績がふるわないために公立高校に入れないという現状を前にするとき、この事態を何とかしなければという気になるのは当然のことだろう。

湘南台中学校の「国際教室」は、一度なくなつてしまつたことがある。しかし、外国人児童が小学校で培つた日本語能力を中学校で枯らしてしまつるのはあまりにも問題だというので、中学校の一部の先生たちが立ち上がつた。中学校の職員会議に、湘南台小学校日本語教室のスタッフである今津先生と、藤沢市の日本語指導員の荻原美先生(ボルトガル語担当)と稻田美晴先生(スペイン語担当)の3名が招かれ、その席で外国人児童向け教室の必要性が討議された。その結果、多くの中学校教員の理解が得られ、「国際教室」の再開が実現したのだった。今、中学校では、JUMPの井上裕史さん(総合政策学部1年)も補助にあたつてている。

硬い硬い学校制度の中でも学生の力・意見は大きい

俄然活発になつた。そこには、今津先生の存在が大きく働いているようだ。先生は、日本語教室はひとりで作つて持つていて。だからこそボランティアで活動する学生の力が活きるのだ。2004年からはSFCだけではなく、茅ヶ崎にある文教大学湘南キャンパスの学生もボランティアに加わる。また、藤沢市内の「国際教室」間の連携も強まり、定期的に「仲良し会」を開いて交流を深めている。今や、日本語教室・JUMPの活動は個々の学校の枠を越えて広がつている。

教室から社会改革へ

湘南台小学校は、国際性の観点から見て、特別な環境を形成しているといえる。今津先生は言う。この学校の日本人児童には、外国人児童に対して、「日本語話せないのに、なんで日本にいるの?」などと思うのではなく、本当の国際理解を体験できる恵まれた環境にいることを感じてほしい、と。

日本で働く外国人は増加しているといつても、他の先進国と比較すると少ない。日本は單一民族性という神話の根強い国であるだけに、外国人児童の親は、どうやつて日本に同化するかを一番に考えている。そして、子供たち

英語だけが外国語じゃない!

湘南台小学校校長は、外国籍の保護者は、子供のことや家庭の悩みを相談できる窓口に恵まれていないと指摘する。カウンセラーが必要でも、スペイン語やポルトガル語を解する人が間に入つてくれないと、意思の疎通もままならないのだ。通訳者の養成も雇用もまだ未整備なので、その部分は教育委員会レベルよりも、むしろ市政のレベルで、問題提起しないといけないと考えているそうだ。小学校から地域へ、地域から日本社会全般へと、意識の変革が拡がつていこうとしている。

JUMPへの期待

湘南台小学校は、国際性の観点から見て、特別な環境を形成しているといえる。今津先生は言う。この学校の日本人児童には、外国人児童に対して、「日本語話せないのに、なんで日本にいるの?」などと思うのではなく、本当の国際理解を体験できる恵まれた環境にいることを感じてほしい、と。

JUMPの活動は、日本語教室の補助、学習ツールの作成だけに留まらない。小学校のフェスティバルにおいては、日本語教室の企画に全面的に協力するし、湘南台小学校では年に数回、独自の授業を行つていている。1コマという短い時間を最大限に活用し、一言で

は「ガイジン」と見られたくないと思っている。今津先生が目指すのは、日本人かガイジンかという二分法を乗り越えることだ。湘南台や藤沢市が多様な人々を積極的に受け入れ、多様な言語・文化が交差しながら全体として豊かなを増していくような場所になれば、と話す。

湘南台小学校校長は、外国籍の保護者は、子供のことや家庭の悩みを相談できる窓口に恵まれていないと指摘する。カウンセラーが必要でも、スペイン語やポルトガル語を解する人が間に入つてくれないと、意思の疎通もままならないのだ。通訳者の養成も雇用もまだ未整備なので、その部分は教育委員会レベルよりも、むしろ市政のレベルで、問題提起しないといけないと考えているそうだ。小学校から地域へ、地域から日本社会全般へと、意識の変革が拡がつていこうとしている。

湘南台小学校は、国際性の観点から見て、特別な環境を形成しているといえる。今津先生は言う。この学校の日本人児童には、外国人児童に対して、「日本語話せないのに、なんで日本にいるの?」などと思うのではなく、本当の国際理解を体験できる恵まれた環境にいることを感じてほしい、と。

JUMPの活動は、日本語教室の補助、学習ツールの作成だけに留まらない。小学校のフェスティバルにおいては、日本語教室の企画に全面的に協力するし、湘南台小学校では年に数回、独自の授業を行つていている。1コマという短い時間を最大限に活用し、一言で

いえば、「世界には英語以外にもいろいろな言語がある」ということを教えている。現在、多くの学校では、いわゆる「総合的学習の時間」を英語教育に充てているが、本当に必要で有益なのは多言語教育の提供だろう。ただ、こ

こでも、やはり、高校への進学が問題となる。高校の入学試験が英語一辺倒だからである。せつかくそれまで日本で楽しく生活してきていても、外国人生徒は、現状の入試制度を前に上位の学校へ進めなくなってしまうケースが多いのだ。ポルトガル語の能力を正式に評価することや、異文化理解のコースを設けるなどして、高校の門戸を外國系の子供に対しても広くする策をとれないものだろうか。将来の社会問題を事前に回避するためにも、そのような政策が望ましいと今津先生は考えている。

JUMPについて

正式名称：JUMP
活動場所：藤沢市立湘南台小学校日本語教室
連絡先：s02359tk@sfc.keio.ac.jp
代表者：小林司（こばやしつかさ）

町にあかりを灯そう

湘南台の大通りに明かりがともり、人々に笑顔がともる。そんな冬の幸せを作っているのはSFC生を含む地元の人たちある研究会プロジェクトからはじまったイルミネーション湘南台はこんなに多くの人に愛されるようになつた

「イルミネーション湘南台」(以下、イルミ)はその名の通り、冬の湘南台の町をイルミネーションで彩ることを目標に一年間活動している。

イルミは2000年、鈴木寛環境情報学部助教授(当時)の研究会プロジェクト「SPAプロジェクト(※)」から発案された。SPAプロジェクト自体は翌2001年をもって解散してしまった。だが、地域の人からイルミネーションは続けたいという要望があり、SPAプロジェクトの一企画だったイルミは実行委員会という形をもって、その後も毎年、地域と商店街と有志の学生が手を取り合って企画を継続させている。今では湘南台の冬恒例のイベントとして、イルミはすっかり地元に定着した。

イルミの実行委員会はSFCの学生だけで構成されているのではない。地元の商店街からも委員が出ている。今年で3年続けての委員という人もいる。学生の参加理由もさまざまだ。子供が好き、イベントを作つてみたい、自分のデザインを世に出したい、等々。地域への奉仕とか貢献とかいう、堅苦しい言葉で考へているわけではない。学生も含めてすべての委員が、自分のできること・やりたいことをイルミというプロジェクトの中で展開しているといったほうがおそらく正確だ。

「イルミ2003」点灯式の前、実行委員会代表の青山芽さん(環境情報学部3年)は、「今年は“参加型”を目指しています」と語ってくれた。そこには、学生を含む地域の人、一人ひとりにどんな形でもいいからイルミに関わってもらいたい。そしてそれをきっかけにして湘南台という町に愛着を持ってもらいたいという思いが込められていた。イルミがきっかけとなって、湘南台が好きになる人が増えること、それこそがイルミの狙いなのだ。

委員のこうした姿勢、学生と地域の人が協力し合える運営体制、そして地元のニーズがうまく噛み合つたからこそ、イルミは四年間続いてきたのにちがいない。

※SPAプロジェクト…Shonandai Producing Activityプロジェクト。発足は1999年9月。「クレオール・カフェ」というイベント、湘南台のお店を中心とした「SPA クーポン」の2つを軸に、地域活性化を目的に活動を行つていた。

正式名称：イルミネーション湘南台
ウェブ：<http://www.illumi-shonandai.net/2003/>
連絡先：illumi_syounandai@yahoo.co.jp



茅ヶ崎サザンビーチに現れた夏の寺子屋

Be Good Cafe湘南

Be Good Cafe 湘南

Be Good Cafe湘南のロゴマーク



思い出いっぱいのドームの前で。Be Good Cafe湘南のメンバー

2003年、夏、神奈川県茅ヶ崎のサザンビーチに白いドームが現れた。
たくさんの出会い、たくさんの発見が詰まった熱い夏の思い出。

それはBe Good Cafe湘南。

「地元」のおもしろさをみんなで共有しようという試みだ。

「地元」をもっと知りたい

「大学入学以来、3年間住んでいるのに、湘南を知らないかった」

そう語りだしたのは、「Be Good Cafe湘南」の代表・高橋理志さん(総合政策学部3年)だ。確かにSFC生の日常はキャンパスと自宅の往復になってしまっていることが多い。

「遊びに行く時も、地元で何かしようつていう発想がなかった。だからまず地元での『遊び方』を知りたって思つたんだ」

地元。この言葉から何を思い浮かべるだろうか。当たり前すぎてなかなか想像できない。だから地元で遊ぶことが、日常的に身近なものに興味を持つキッカケになるとを考えた。

しかしどうやって「遊ぶ」か。例えば湘

南というエリアでいえば、漁師さんといふ興味深い人々がいるが、なかなか接点がない。地元におもしろい人がいても知り合う機会がないのだ。だつたらそういう人が集まる場所、そういう人から日頃聞けない話が聞けたり、一緒に体験できたりする場所を作りたい、というのが高橋さんの想いだつた。

そして高橋さんは友達から茅ヶ崎の知人を紹介してもらう。それが茅ヶ崎とのつながりの始まりだつた。どんどん茅ヶ崎の人と知り合つて仲を深めていく中で、湘南ならではの魅力が集まつている茅ヶ崎で何かやりたいと思うようになつた。

さらに彼はSFCで学んでいることも活かしたいと考えた。自分が大学や研究会で勉強していることを社会で実践してみる。その実践は、地元の素材を使つて行なう。そして、自分たちだけではなく、地元の人も地元を楽しむキッカケになるような何かを作る。

「俺たちはリアルに体感できるメ」ディアを作つて、それを地元に使つてもいい。ただそれを俺たちだけが作るんじゃなくて、地元も受け手であつて作り手である、そんなイベントにしたかったんだよ。そしてBe Good Cafe湘南は始まつた。

カフェはおしゃれじゃないよね

イベントを開催する空間は、きれいでも、かつ非日常的な感じにしたい、そし

て茅ヶ崎の地元の人々と一緒に作れる空間にしたいと高橋さんは考えていた。

「やっぱ、おしゃれじゃないとね。カフエだからさ。空間 자체を楽しめる」と、企画も特別に感じるでしょ」

さまざまな案が出たが、最終的にはあるSFCの環境サークルから手法を教えてもらい、三角形のパネルをいくつも組み合わせて作る簡単な構造のドームをイベント空間にすることにした。

これなら地元の人々と一緒に作れる、というのが決め手の一つであつた。ドームを構成する三角形のパネルはプラスチック・ダンボールという素材で、これは従来、箱を作る以外には使用されていないものであるため、バラ売りをしてくれる唯一の会社が京都にあり、高橋さんはわざわざ出かけて行つて社長と交渉した。プラスチック・ダンボールでドームを作るという、この素材の全く新しい使い方の発想やBe Good Cafe湘南のイメージを聞いて、その社長は原価に近い値段で提供することを約束してくれたのだ。

「お金で解決するつていうのはおもしろくないなつて常々思つていた。イベントは、人と人との繋がりで作られていくことが面白い。その繋がりを作るキッカケは、『買う』じゃなくて『もらう』つていう発想。そうじやなきや作り出せない価値があつて、そこに重きを置きたいんだ」



青空の下でワークショップ



ドームの作業風景

ワークショップの様子
地元のお年寄りも参加

ただお金で売買するだけなら、茅ヶ崎の人々とコミュニケーションでは繋がらない、と高橋さんは考えていました。

新しいアイデアを受け入れてもらうのが大変だったときもあった。イベントは茅ヶ崎のサザンビーチで開催されたのが、開催の許可がなかなか下りなかつた。「俺たちのやりたいことばかりを前面に出しても、やっぱり通らないんだよ。なぜかっていうと、他の海の家と競合してまわりの売り上げが落ちるとか。新しいことをやることに対するアレルギーとか」。

それでも高橋さんは海水浴場組合の人の家に一週間通いつめ、結果的には「ビーチ寺子屋」という、実際の企画とは異なる名称でイベント開催の許可を取つたのだつた。

実際の世界では、「こういうことをやりたい、こんな意義があります」と夢を語れば企画が通るわけではなく、自分のやりたいことと現実をすり合わせることが必要なのだ。高橋さんはそのことを学んだといふ。

茅ヶ崎がテーマのカフェ開店!

いよいよイベント開始。「ビーチ寺子屋」として、地域の素材を活かしたワーキングショップと「オープンマイク」というトークイベントがメインイベントとして開催された。

オープンマイクというのは、ゲストとホストとのトークセッションなのだけ

れども、そこに来ている誰もが話に参加できるという形式のもの。茅ヶ崎でフランダンスをやつている人たちに来てもらい、その人たちのダンスを鑑賞するだけでなく、オープニングマイクを通してダンスを作つていくプロセスや、ダンサーの手

の動きにあるメッセージを教えてもらつたりもした。また、湘南にまつわる曲だけを作り続けるゲストからは、その演奏を聞くだけではなく、湘南に密着したその生活を話してもらい、曲にこめられた深い世界を知ることができたのだった。茅ヶ崎という地域ならではの生活と文化を、アート、エンターテインメントなどさまざまな媒体を通して体験することができた、と高橋さんは語る。

また、ライフィストリリーに興味があり、茅ヶ崎の人々に人生経験を語つてもらつて、そこから歴史を学ぶワークショップを開催したメンバー。カンボジアの染物や文化に興味があり、茅ヶ崎の農園からもらった梨を使ってカンボジア染物を試すワークショップを開いたメンバー。学んでいるコンピュータミュージックを活かし、茅ヶ崎の生活音を集めて一つの曲にするメンバーもいた。このように、それぞれが大学で学んでいることを茅ヶ崎で実践してみたのである。

最後の2日間はコミュニケーションで繋がるかかんじどんどん繋がりが広がること。また人と繋がったことでその地域とも繋がった気がする。まだまだ100%成功とは言えないけどイベント後もイベント中に知り合った人との繋がりがあるので、それが続していくのがいいですね」

地域の人から見たBe Good Cafe湘南

■倉田茂男さん(辻堂在住の会社員。代表の高橋さんと多くの茅ヶ崎の人を結び付けてきた)
「彼のほとりでも前向きだったよ。どんなに失敗ばっかりしても前向きだったよ。どんなに失敗ばかりしてもあきらめないとね。でもわからないとこには素直にわからないって言つてくれ。それに海をハンドマークとして選んだ企画はおもしろい。JR Be Good Cafe湘南を1回だけなくて続けていいのか欲しくて、継続していくといいさらにイベントだけで終わらない関係が生まれるからね。そういうのが今の世の中で失われがちな関係だから」

■吉田洋子さん(立ち上げ当時からBe Good Cafe湘南を手伝つてきた。藤沢在住)

「近くにあっても大学っていうのはやっぱり別世界のようなものの、その学生さん達と関わって希望が持てました。地元のおじさんおばさんも学生からのアプローチにすごく喜ぶ。普段接点のない地元の人達を学生さんと繋いでくれました。私の子供達にとっても大学生と触れ合つていい機会になりました。大事なのは定着すること。これからはもっと自信を持って地域を巻き込んでいいと思う」

■古屋賢悟さん(六会のぼうとう屋へバロ谷主人。手打ちうどんのワークショップを行なつた)

「Be Good Cafe湘南に関わつて最高に気持ちよかったです。学生の積極的に地元つながりうつする姿勢に元気をもらいました。いいエネルギーをもつた、海を目の前にした本当におおらかなイベント、気持ちよかったです。また今種に芽が出たかんじですね」

■水野賢生里さん(総合政策学部3年、湘南台在住。自然染色のワークショップを行なつた)

「Be Good Cafe湘南のいいところはひとつ繋がるかかんじどんどん繋がりが広がること。また人と繋がったことでその地域とも繋がった気がする。まだまだ100%成功とは言えないけどイベント後もイベント中に知り合った人との繋がりがあるので、それが続していくのがいいですね」



「アートや音楽というエンターテインメントを使って 社会的な問題をうまく飲み込みやすい形に。それが理想」

Be Good Cafe湘南 代表・高橋理志さん

Be Good Cafe湘南のじだわり

2003年、産声をあげたBe Good Cafe湘南のこれからについて尋ねたら、「赤字は出したくないです(笑)」といつのが高橋さんの第一声。学生とはいえ、ひとつの団体の代表としての本音だろう。しかし「Jで強調しておきたいのは、このイベントは利益を目的にやっているのではないということ。

「例えば輸送するためのトラックを農家から借りたんだけど、そのお礼としてお金ではなくて、梨の袋がけを3日間やるとかね」と笑顔で語る。お金に代わる価値を見つけるといつBe Good Cafe湘南で目指したもののはんな形でも実践されていたのだ。

ワークショップについては、2004年はオープンマイクにもつとじだわりたいという。今回のオープンマイクはゲストスピーカーと皆が決められた時間内で話すものだったが、せっかくの面白い話題も、一回で終わってしまう。次はもっとその人を追いかけて、ちょっとの間、その人と関係を続ける、その全てが「オープンマイク」というイベントになるようにしたい。何日間か行動と共にしたり、一緒に作品を作ったりしたつていい。最後は発表会という形に結実し、イベントの一部となる。そのプロセスそのものに重きを置きたい、と高橋さんは今後を語る。



朝から手打ちうどん体験。たくさんの子供達と一緒に

第1回のBe Good Cafe湘南は順調なことばかりでもなかつた。何回も壁にぶつかり、地元の人たちしなめられたりともあつた。それでも常に前向きにやつてきた。

「想いがあつたからね」。Jの一言がとても印象的だ。

そんな彼とメンバーには、Be Good Cafe湘南で得た形のないものがいつぱいある。その中でもいちばん大きいことは茅ヶ崎などの湘南エリアで、知り合いや繋がりができることだ。地元の人たちがどういう生活をしているのか、湘南というものが垣間見られたことで、自分も湘南に属している、湘南に住んでいるんだつて言えるようになつたと、高橋さんは語つた。

やり始めたことを続けることがいちばん難しい。今回出会えた地元の人たちとの繋がりをこれからも維持し続け

Be Good Cafe湘南について

大学生生活で、湘南エリアに住んでいるのに「湘南」に対して愛着がわかなつたり、魅力を感じられない。というのは地域の活動、お店のこだわりなどが見えてこないからと考え、そんな地域的魅力を引き出して、楽しめる形のイベントを作りたいとSFC生を中心設立。2003年8月に茅ヶ崎のサザンビーチでイベントを実施。地域の素材を生かし、地域の人と一緒にイベントを創り上げることをコンセプトに、ワークショップなどを通じて地元をもっと知ろうという試みをした。

正式名称：Be Good Cafe湘南
代表：高橋理志（たかはしまさじ）
ウェブ：<http://begoodcafe.com/shonan/index.html>
連絡先：080-5403-4772

てJを初めて、Jのイベントは本物となるのだ。

「考えるのと、実際にやるのは違う。まだ1回目だから、パーンと終わつた花火なんですね。でも1回やつたこの経験つていうのは大事だなあ」

課題は山積みだろう。しかし、それがまた来年への原動力となつていく。「今はメジャーじゃないけど、もうちょっと（Be Good Cafe湘南）の名前が売れて、学生じ地元の人が一緒にイベントを作ることで知れるようになつて、俺たちがアプローチかけなくとも、ぜひ何かやりたいて人が集まつて来るようになつたら、もう最高だよね」と笑いながら語つてくれた高橋さん。

2004年のBe Good Cafe湘南を楽しみにしたい。

人々を巻き込む社会変革の物語

生活者の社会参加



授業では理論的なことも学ぶ

SFCと地域・社会がかかわるプロジェクトの中には授業や研究プロジェクトをその起源とするものも少なくない。その中の一つ「生活者の社会参加」は

SFCが目指している「問題発見、そして問題解決へのプロセス」を実践する科目である。同科目担当の櫻田周三非常勤講師と、昨年度履修者の小山健太さんへの取材をもとに紹介しよう。

SFCと地域との繋がりを考える上で好例となる科目を紹介しよう。

策学部教授 櫻田周三（同学部講師）という科目がそれである。「生活者」に、今の自分の殻を破つて、社会変革の動きに参加してもらうことを目的としている。

ここでいう「生活者」とは、社会を変えようという運動を働きかける・仕掛ける人々と、その働きかけ・仕掛けに応えて参加していく人々の両方を指している。つまり、社会を積極的に生きようとするすべての人々を指しているといえよう。

また「社会参加」とは、さまざまな職業や年齢の生活者が「既存の立場や役割を超えて新しい動きを社会に作り込んでいくプロセス」であると、同科目では位置付ける。よりよい社会を目指した自発的なプロジェクトを開拓するこど、と、こういうこともできるだろう。

人々を巻き込む仕掛け作り

同科目は、まず社会を変える運動を働きかけたい・仕掛けたい履修者が、「この指止まれ」と仲間を募るところから始まる。まず自らプロジェクトを企画し、提案する。提案した履修者たちの想いやアイデアに呼応して、その他の履修者は参加希望を表明し、それぞれグループに分かれる。各グループは具体的に計画を練り、協力してくれる組織

などを探して、実践に移る。そして学期の終わりに各グループがその時点での結果報告を行う。

今年度は7、8名で構成される9つのグループがプロジェクトを進めている。プロジェクトテーマだけ列挙しよう。

「地雷除去活動について僕達のできること」「育児の社会化を目指した病児保育システムモデル事業」「商店街の空き店舗を利用した高齢者のためのミニユニティースベース作り」「商店街を軸としてソフト面での地域活性化」「日本最古の孤児院でのアートワークショッピングと展覧会」「町のナイスなおばちゃんおじちゃん人材バンクをつくる」「子育て環境の活発化」「社会におけるセクシャルマイノリティという考え方をなくす」「中高生が人生について大人に相談できる場をつくる」

テーマだけでは何をやるのかわからぬものもあるが、こうして見るだけでも様々な分野で、そして様々な規模でプロジェクトが提案され動いていることが分かる。

同科目を担当する櫻田講師は次のように語る。「肝心なことは、各グループの活動が、自分たちだけで自己完結してしまうないように、多様な生活者の社会参加を促していくことです。これが大変難しいのですが、そのプロセスで学べることが山ほどあります」。

同科目の目標は「社会参加」は、単に

履修者だけが行なえばよいものではないようだ。

「不格好でも何かの動きが事実として生まれれば、それがさらに新たな動きを誘発する場合もあります。プロジェクトが注目した問題が本質的なものであり、考案した解決策にボテンシャルがあるなら、プロジェクトの登場人物は変わっても物語は続いていきます」。これも櫻田講師の言葉である。

ここで昨年度の同科目のプロジェクト「バレンタインデー商戦を利用したNPOの資金獲得支援活動」（バレンタイン・チーム）を紹介しよう。

このプロジェクトを立案した小山健太さん（総合政策学部4年）は1年生のときにあるNGOの主催するスタディ



櫻田周三講師の授業後のひとこま

最初の登場人物と物語の展開

KEIO SFC REVIEW No.20 * Special Edition | 12



「人々を巻き込む仕掛け—多様な生活者の社会参加を促す」

櫻田周三 非常勤講師（総合政策学部・看護医療学部）



小山健太さんは現在「生活者の社会参加」をSAとして支える

一学期間という短い期間の中、小山さんのプロジェクトに惹かれて参加し運営を行なえるリーダーを養成するための建物を買つた。

これは、簡単にいえば、バレンタインカードを作成し、売上金がどのように役立つかを書いた紙と一緒にバッケージする。それを各方面の協力をあおいで直接・委託販売し、売り上げで

タインデー・カード企画だ。

こうして立案されたのがこのバレンタインデー・カード企画だ。

自分が興味をもつて取り組んでいる国際協力という分野を、もっと多くの人々に知つてもらいたい、参加してもらいたい。それには、まずは手軽にできることから参加してもらおう」

「自分が興味をもつて取り組んでいる国際協力という分野を、もっと多くの人々に知つてもらいたい、参加してもらいたい。それには、まずは手軽にできることから参加してもらおう」

た履修者たちは、分担して活動を広げていった。「企画の組み立て」「商品開発」「販路確保」「広報」「Web」など、その分担はさながら一つの企業活動のようだ。

彼ら自身が櫻田講師の言うところの物語の登場人物であることは言うまでもないが、彼らの行く先々に、巻き込まれていく登場人物がいる。カードのデザインを描くプロのデザイナー、カードをまとめて購入し自分たちの店に置いてくれる団体、結果として取り扱つてくれる地元の学校、取材してくれる新聞記者、そして樋口作業に集まつたボランティア…。

強いおもいは人を動かす

それでも、もちろん果たせなかつたこと（学校でカードを扱つてもらうなど）は多くある。だが小山さんは、いちばん大事なことは社会参加をしようとする自分たち生活者の「おもい」であると言つ。

小手先だけでもカードを売ることはできるかもしれないが、それでは意味がない。熱く強いおもいを生活者が共有し、自分たちの活動に「誇り」をもつことが大事なのだと小山さんは語る。そして事実、この物語は今もなお動き続けている。前述のNGO内の学生組織では今春、新たなカード販売が企画された。そして小山さんのプロジェクトが生んだカードは今もなおこの組織

の手によってさまざまなイベント会場で販売されている。

最後に、小山さんからのメッセージ

「すでにボランティアをやつてる人は、自己満足に陥つていないかどうか再確認しつつ、さらに社会の役に立つこと、人の心に響くことを続けてほしい。ボランティアを敬遠したり、やつていな人も、今は無理をする必要はないから、小さなことからやつてみてほしい。そうすれば世界が少し変わるのはず」

生活者の社会参加について

- 正式名称：生活者の社会参加
- 通称：同上
- 連絡先：「生活者の社会参加」は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの開講科目である。ウェブは授業履修者向けに限定されているので、ここではURLを紹介しない。なお、本文中に紹介したバレンタインデー・カードのプロジェクトは「草の根 援助運動学生班」のウェブ(<http://www.angel.ne.jp/p2aid/youth/index.htm>)に結果報告など詳細が掲載されている。

創作活動を通じて人と向き合う コトバノアトリエ



みんなで作った雑誌を抱えるスタッフ

「人に優しくするという行為をコトバに表すのは難しい」
後輩とのそんなやりとりがきっかけとなって生まれた「コトバノアトリエ」。
約2年の活動を経て見えてきたその意義とは。それを探るべく、
設立者であり代表である山本繁氏(2002年度環境情報学部卒)に話をうかがった。

コトバノアトリエ(以下、コトリエ)は、2002年3月、SFCの在校生と卒業生の5人によって設立された。以来地域の中学・高校生を対象に、文章表現と対話をを行う、長期間のワークショップを中心に行ってきた。ワークショップの内容は、週に1回、藤沢市民会館に中学・高校生とスタッフが集まり、約半年かけて小説・エッセイを創作することも、お互いにそれを発表し批評しあうのである。そしてその活動を通して、作家と編集者の仕事の両方を経験し、創作と批評のあり方を学ぶ。ひいては他者の世界観を知り、自己の世界観を育していく。これがコトリエの活動のねらいである。設立以来着々と歩みを進め、活動の中心である長期間のワークショップは、2003年11月に第3期目を迎えた。この第3期は、「リトルマガジン・プロジェクト」と題し、コトリエ事業拡大の第一歩であった。期間は従来の約2倍の10ヶ月、その間に5回雑誌を編集し、藤沢市や鎌倉市の中学・高校や公立の施設に配布したという。

参加者もスタッフもかなり楽しんでいる様子である。3期連続で継続して参加した子や、スタッフの家まで遊びに来た子、さらにはコトリエにはまったく子供の影響で小説を書き始めた父親までいたそうだ。また楽しいだけではなく、第1期目の作品集が第20回新風舎出版賞の最終選考に残るなど、創作作品の質の高さもうかがわせる。

まずは、山本氏が地域に対して、どのような問題意識を持つて活動しているのか、それを聞いてみた。すると、2つのことが見えてきた。

【普通】の大人がいない

「今子供には、普通の大人、言い方を換えると、教育目的以外で接する大人がいないんですよ。でも、自分のことを教育しようと思つて近づいてくる人つて、子供は嫌いなんですよ」

多くの中高生は、その居場所を、家庭・学校・塾の3つに限定されている。そしてそこで接し合う大人は限られているだろう。両親、学校の先生、塾の講師。いずれも、教育を目的としている。今の多くの中高生に、この3者以外の大人と触れ合う機会がどれだけあるだろうか。「〇〇しろ」「××してはいけない」。そう言われ続けることが、中高生にとってどれほど息苦しいものか、想像に難くない。

「僕らは、ワークショップの場では、教育のことは言わない。僕らは、作品を作ろう、いいものを作らうとだけ言う」。その言葉からも、その問題意識が強くあらわれている。

2つ目は、コミュニケーションについての問題意識だ。山本氏は、ある批評家の次のような指摘に深く納得するといふ。

濃密なコミュニケーションの場を作ろう

「今問題なのは、子供たちのコミュニケーションのスキルではなく、濃密なコミュニケーションをする場所がないということではないか」

確かに現在、コミュニケーション能力が大事だとされ、中学・高校ではグループ活動の中でコミュニケーションを学ぶことが図られている。同じことが大学でも重視されていることは、私たちによく承知しているところだ。

しかし、「表面的にではなく、心の奥



ワークショップの場ではコミュニケーションが重視される



「この雑誌は、私たち19人の関係性から生まれた」

コトバノアトリエ 代表・山本繁さん

底で触れ合うような「ミニミニケーション」の場がないのがいちばんの問題」と山本氏は語る。

関係から価値を生みだそう

コトリエでは週1回のワークショツプを開いているが、山本氏は、この「継続性」の中にあるものを大切にしている。こんな言葉がある。

「この」のワークショップで作る雑誌は、誰か1人が作ったものではなく、私たち19人の関係性の中から生まれてきたもの。これと同じものは、他の誰にも作ることが出来ないんです」



みんなの筆顔が、なにより濃密なコミュニケーションを物語る

この言葉から、参加者とスタッフがお互いに真摯に向い合っている姿が垣間見えてはこないだろうか。しかし、全く知らない者同士が、最初からこのように出来るわけではなさそうだ。山本氏自身、「濃密な関係を築くには、半年から1年という期間がどうしても必要です」と語っている。誰かと本気で向き合うためには、多くの時間が必要となるのだ。

そしてコトリエでは、創作した作品を通して人と対話をする。それを山本氏は、こんなふうに表現した。

そしてコトリエでは、創作した作品を通じて人と対話をする。それを山本氏は、こんなふうに表現した。

「お母さんのこと」嫌い“つて言う子供がいるとしますよね。でも、人の感情はみんな、好きと嫌いの間で動くんですね。どうやっても言葉にならない感情を持つていたら、そこを話し合っていく。間の部分を話し合っていく。小説やエッセイについて語ると、人の感情について語るのは非常によく似ているので、批評し合うことによって、人と人の濃密なコミュニケーションが自然に生まれるんですよ」

このようなコミュニケーションに、コトリエの意義はあるのではないだろうか。子供が誰かと本気で向き合う経験、誰かと心の底を語り合う経験、そしてお互いを分かり合う経験。コトリエは、そういう場を作ってきた。

コトバノアトリエについて

正式名称：コトバノアトリエ
通　称：コトリエ
活動場所：藤沢市民会館
ウ　エ　ブ：<http://web.sfc.keio.ac.jp/~s03037ma/kotolier/>
連　絡　先：kotolier@mail.goo.ne.jp
　　　　　　: 090-4177-0468(山本氏携帯)
代　表　者：山本 繁（やまもと しげる）



コトバノアトリエ リトルマガジン
「夜更かしの仕方教室」より
創刊号・2003年10月発行

学生が動かす政治、変える未来

POPCS (The project of political community service)



タイムキーパーを務めるPOPCSメンバー

2003年10月、衆議院議員総選挙を前に、藤沢市で公開討論会が開催された。

これを実現させたのが、SFC生によって構成されている団体「POPCS」だ。

実際に討論会の現場をたずね、来場者にインタビューを行なうとともに、

POPCSのメンバーにも、活動の目的など詳しいことを尋ねてみた。

最近の若いものは…

「最近の若いものは政治に関心がなくなった」というセリフは、年配の人達の決まり文句である。確かに現在、20代を中心とする若年層の政治意識は低いと言わざるを得ない。

しかし最近はむしろ、「若い人=政治に無関心」という構図が当たり前のようになってしまい、居酒屋などで政治について熱心に議論しあう大学生たちを見かけると、かえって奇異に感じられるほどだ。

考えてみれば、若い人達こそがこれから日本の政治を担っていくわけであるから、そんな彼らが政治に興味を持たないというのは何とも困った話ではある。しかしそんな心配をよそに、若年層の投票率は年々低下の一途をたどっている。

それでも、政治に関心を示す若者が全くいないという訳ではない。

若者の団体

SFCの学生達によつて運営されている「POPCS」(ポップクス)は、「政治と市民のジョイント」を理念に掲げる団体である。

特筆すべきは、そのメンバーが全員、選挙権も持たない入学したての大学1年生であるということだ。つまりこの

団体は、ほぼ完全に「最近の若いもの」によって構成されているのである。

そのPOPCSが母体となつた「寒川町・藤沢市で公開討論会を実現する会」によつて、衆議院議員総選挙の公示日がせまつた2003年10月24日、藤沢市労働会館で公開討論会が開催された。

学生主体の討論会を開催する目的として、POPCSはその趣意書の中で「時間的余裕がある学生が中心となって公開討論会を開催し、それを地域に根づかせることができれば、今以上に市民と政治の距離が近くなるのではないか」と思っています」と述べている。

当日の来場者は40代から60代の中年高齢層を中心に130人ほどで、一般の来場者の他にも、新聞社や、テレビ

学生らしい討論会



立候補者をこの目で見ようと、多くの人々が来場した

討論会には、寒川町および藤沢市を含む神奈川12区の立候補者である阿部知子(社会民主党)、桜井郁三(自由民主党)、高松みどり(日本共産党)、中塚一宏(民主党)の四氏が出席し、コーディネーターとして、大塚寿昭氏が招かれた。

討論会は、予定より少し遅れて始まつた。初めに、POPCSが制作した候補者紹介を兼ねた映像が流される。

討論の形式は、年金、イラク問題、教育など、テーマごとに学生達が現在の日本の状態を説明、問題提起をし、それらの問い合わせして各立候補者が答えるというもの。

進行は順調に進められたが、候補者の名前が書かれた紙に誤字があつたり、緊張して言葉に詰まる学生がいたりなど、いかにも「最近の若いもの」らしい(?)一面も見られた。その一方で、本題からそれた内容の話をする候補者に、「その辺りの意見は論点がずれている」と思うので控えてほしい」という鋭い指摘を入れることもあつた。また、立候補者が別の立候補者に質問する時間を設けるなど、今までの討論会にはない斬新な企画も見受けられた。

さらに、運営上の公平を期すために、タイムキーパーを使って候補者の発言時間を均等に配分し、客席からの声援、誹謗、中傷、拍手を禁止するなど、討論



「やるからには質の高いものを提供したい」

POPCSメンバーの大塚綾子さん

会 자체が特定の候補者の色に染まらないようにするための細やかな工夫も見られた。候補者が座る席順もくじで決めるという徹底ぶりだった。

もっと開催してほしい！

討論会終了後、立候補者である高松みどりさんは全体の感想として、「学生の皆さんのが政治を語る場を作ってくれたのは大変に素晴らしい事だ」と語ってくれた。

一般来場者に実施したインタビューの結果は肯定的なものが多く、「選挙を身近に感じる事が出来た」、「立候補者個人の声を聞くことが出来た」、「今回の衆議院選挙だけではなく、これからももっとと開催してほしい」等の意見を多く聞くことができた。

一方、少数ではあるが「候補者に遠慮しきではないか」、「もう少し今回の選挙に論点を絞った討論をして欲しかった」というような批判的な見解も得た。

より高みを目指して

今回の討論会を主催した「寒川町・藤沢市で公開討論会を実現させる会」の広報担当であり、POPCSのメンバーでもある大塚綾子さんは「行動をおこした」という点では今回の討論会は成功だと思います。改善すべき点はその

行動の質ではないでしょうか。やるからには質の高いものを皆さんに提供しなければいけないですね」と語った。

また、周辺の地域と十分に関わりをもてたかという問い合わせに対しては、

「POPCSの最終目標は、自分たちが市民の政治的意識を高める行動を起こすこと、全国各地にそれを誘発させよう、という壮大なものです。周辺地域との関わりは非常に重要なだと考えていました。残念ながらそれは、今の段階では十分とは言えないでしょう。しかしながら関わっていこうという意思是強くあります。実際に2月の藤沢市長選挙で公開討論会を開きたいという市民団体の方々からノウハウを教えてほしいと頼まれ、今度その方たちとお会いする予定です。私たちの行動が元になって周辺地域にこのような活動が根付いてほしいと思います」



立候補者に質問を投げかける学生

と答えてくれた。

多少改善すべき点はあるものの、今回の討論会は「学生が地域と交流し選挙を語る場を作り、市民の政治意識を向上させる」という目的から見て、一定の成功を収めたと言えるだろう。先人が苦労して勝ち取った選挙権をムダにすることは何事かと嘆く前には非、彼らがこれから開催するであろう、さまざまな企画に足を運んでみてほしい。きっと、日本もまだまだ捨てたもんじやないなという気分が盛り上がりつついていいにちがいない。

小さく、そして地道にではあるが、POPCSは確実に未来を変えている。POPCSは非常に重要なだと考えていました。残念ながらそれは、今の段階では十分とは言えないでしょう。しかしながら関わっていこうという意思是強くあります。実際に2月の藤沢市長選挙で公開討論会を開きたいという市民団体の方々からノウハウを教えてほしいと頼まれ、今度その方たちとお会いする予定です。私たちの行動が元になって周辺地域にこのような活動が根付いてほしいと思います」

POPCSについて

正式名称：The project of political community service
通称：POPCS
代表者：菅沼明正（すがぬま あきまさ）
ウェブ：<http://web.sfc.keio.ac.jp/~s03548as/info03-13/>
連絡先：080-3172-6269（代表者携帯）

湘南台の交差点

こうさ展



2002年の夏、ひとりの学生が床屋へ行った帰りに、何の気なしに隣の画廊に立ち寄った。

そんなふとした偶然の出会いから、こうさ展は始まった。

湘南台の地でSFC生が地域の人といっしょに作品を展示したり、コンサートをしたりする……。

さまざまなアートを介する人ととの交流の場、「こうさ展」の姿を探る。

こうさ展の元代表、友岡梢さんと森裕介さん



音楽を聴きながら即興で絵を描くライブペインティング

交わる場所、出会いの場所、こうさ展

2000年のある日、高橋大伴さん（当時、環境情報学部3年）が湘南台の駅のすぐ側にある「はるな画廊」にふらりと訪れるまで、オーナーの春名三記子さん（以下、「はるなさん」）にとって、SFCの学生は不明な存在だったという。しかし、高橋さんとの出会いをきっかけとして、はるなさんは学生たちのデジタル作品の展示の話を彼にもちかけた。これが、こうさ展の発端である。第2、3回は、はるなさんとSFCの学生サークル「美術部」のメンバーが中心となり、地域の造形作家たちを巻き込んで展覧会を催した。実際にはアーロング作品も多く出展されたという。

夜には、ライブペインティングをお

こなつたり、親睦のために餃子パーティーを開いたりした。おじいちゃん、おばあちゃんから若い世代まで、多くの人が参加できる場が生まれた。学生と地域の人との交流の場、デジタル作品とアナログ作品の交差の場、そんな2つの意味を込めて、このはるな画廊の催しは「こうさ展」と名付けられた。

「ライブペインティングやコンサートをやって、いろんな世代の人たちが集まつて来てね、かなり盛り上がったんです」

当時の写真を見せてくれながら、その年のこうさ展を動かした中心メンバーの友岡梢さん（環境情報学部3年）はいきいきと話す。ある日のコンサートには50人もの人が入場して来たのだとか。実際、そのコンサートの様子を写した写真からは、湘南台の一角とは思えないような熱気が感じ取れる。

展示会に訪れる人たちの中には、パソコンで見せるCG作品などの新しいものに対して驚きや違和感を抱く人もいたようだ。しかし、興味を持つ人もまた現れ、「こうさ展はしだいに交差点のよう」人が行き交うところになつたのよ」とはるなさんは言う。

こなつたり、親睦のために餃子パーティーを開いたりした。おじいちゃん、おばあちゃんから若い世代まで、多くの人が参加できる場が生まれた。学生と地域の人との交流の場、デジタル作品とアナログ作品の交差の場、そんな2つの意味を込めて、このはるな画廊の催しは「こうさ展」と名付けられた。

自然な「たまり場」となつている。というよりも、はるな画廊では、「たまり場」であるふだんの時間に、こうさ展のための準備が進むようだ。

気軽に出入りできる場所としてのはるな画廊の様子を、はるなさんは語つてくれた。はるな画廊に作品を見に来たり、「お茶」をしに来たりする地域の人人がたくさんいる。学生たちは、その人たちと話ををするのを楽しみにしているという。

「旅行で湘南台を留守にする人の植木を預かつたり、帰つてきた人から旅の話を聞いたりして……、そういうのつていいわよね。」

イベントが終わっても続いていく人間関係のようなものが、はるなさんの思い描く地域交流なのだ。

作品を見たり、触ったり、イベントに参加したりといった中で、思いがけない出会いが生まれ、地域の人や学生が、気兼ねなく出入りができるようになる。そこにこそ、こうさ展のよさはあるようだ。

本当の交流とは

こうして地域の人とのなごみの場が成立している反面、なかなかイベントが続いて行かないという悩みもある。

友岡さん、森敦さん（環境情報学部4年）、美馬直輝さん（環境情報学部4年）などのコア・メンバーがはるな画廊とのつながりを持ち続けている一方で、イ



「形だけじゃない本当の交流とは？」

「はる画廊」オーナー・春名三記子さん

「回数を重ねることに、最初と同じような熱意を持ち続けることができなくて」とはるなさん。立ち上げのときのダイナミズムを毎年持続していくというのは大変なことなのだ。

また、SFC生や地域の人などを交え、月に一度、はる画廊に集まつていいろいろな話をしようという企画もしばらくして「何か違う」という意識が生まれてきて、結局終わってしまったのだそうだ。東縛のない、あくまで自然体なつながら、それがなかなか続いていかない。形式だけではない本当の交流というのはどうしたら持続するのか、はるなさ

ベントとしてのこうさ展は今、ぎりぎりのところで辛うじて続いているという状態にある。2003年は森さんと美馬さんの二人展という形で開催されたが、以前のこうさ展とは異なり、個展色の強い展覧会になった。「今回は二人展で、なんとか皮一枚でつながった。今年からはまた前のように盛り上がりがあればいいんだけど」と森さんは話す。こうさ展は、SFC生数人とはる画廊との日常的な付き合いから始まった成り行き的な面も強く、無理に組織化したり、がむしゃらに企画を立てたりすることがない。そのためか、次の世代ははる画廊とのつながりははる画廊でのつながりをいつそう強化していくこういうような気持ちを持ち合わせてはないのだという。

「中心の人たち以外、来なくなつたのはさびしいわ。でも、よくよく考えれば、中心の人たちが親密になつただけでもすごいことかもしれない。だって、ふつうの商店で、そんなお付き合いは生まれないでしょ(笑)」

湘南台に帰つてくる場所がある。おじちゃんやおばちゃんや、美術作品に興味を持つ人たちが、不思議と出会つてしまう場所。そこが湘南台のこうさ展(=交差点)なのだろう。



はる画廊にはさまざまな世代が集まる

「こうさ展」について

主催：はる画廊、企画：SFC生(主に元美術部)、参加者：SFC生、地域の人といった構成で、2000年から開催されているアートイベント・展覧会。

「はる画廊」について

湘南台の駅すぐそばにある画廊。
個展やグループ展、カルチャー教室も開催している。
住所：〒252-0804 滕沢市湘南台2-2-1
シーライト湘南台ビル2F



こうさ展を訪れた人たちの感想カードを年齢層別に貼ったもの

カメラがつなぐひとのるつぼ

湘南市民テレビ局



湘南TVメンバー 石元龍太郎さん

2003年、湘南市民テレビ局は、市民の自主的な映像の制作・配信を支援する学生と市民の共同プロジェクトとしてスタートした。市民が個人として自由に映像を制作しながら、しだいに人のネットワークの中に入り込んでく。テレビを媒介として結びつく地域社会がそこにはあった。

湘南市民テレビ局（以下、湘南TV）は「市民ディレクター」の育成を目的としている。市民ディレクターとは、地域に存在する身近な題材を自分なりの視点で取材し、映像化する市民のことだ。参加者は必ずしも以前に映像制作に関わったことのある人ばかりではない。むしろ、実際には初心者の参加が多い。そのため映像を企画するためのミーティングや、映像制作初心者のための技術的なサポート、機材の貸出などが行なわれている。現在では神奈川県藤沢市を中心として参加者が集い、積極的に映像作品を制作している。そこで制作された作品はインターネット上で配信され、視聴者からの反響を呼んでいる。湘南TVは映像制作を通じて、地域の情報をを集め、共有する「場」を創造しているのだ。

市民のためのメディアがない

大企業が不特定多数に向かつて情報を発信するメディアはあっても、市民同士が地域の情報を発信したり共有したりするメディアは少ない。その問題に気づいたのは湘南TVの創設者であり、運営委員会のメンバーである石元龍太郎さん（環境情報学部4年）だ。2002年、高橋恭子（特別招聘教授）研究室で行った市民テレビ局に関する研究が湘南TVの発想のもとなつた。ふだん身近な地域に問題があつても、

それを市民が上手に伝えて共有する手段がない。湘南TVプロジェクトはそんな手段、新しいメディアを作るという野心的なスタートをきつた。

湘南市民テレビ局（以下、湘南TV）は「市民ディレクター」の育成を目的としている。市民ディレクターとは、地域に存在する身近な題材を自分なりの視点で取材し、映像化する市民のことだ。参加者は必ずしも以前に映像制作に関わったことのある人ばかりではない。むしろ、実際には初心者の参加が多い。そのため映像を企画するためのミーティングや、映像制作初心者のための技術的なサポート、機材の貸出などが行なわれている。現在では神奈川県藤沢市を中心として参加者が集い、積極的に映像作品を制作している。そこで制作された作品はインターネット上で配信され、視聴者からの反響を呼んでいる。湘南TVは映像制作を通じて、地域の情報をを集め、共有する「場」を創造しているのだ。

市民のためのメディアがない

大企業が不特定多数に向かつて情報を発信するメディアはあっても、市民同士が地域の情報を発信したり共有したりするメディアは少ない。その問題に気づいたのは湘南TVの創設者であり、運営委員会のメンバーである石元龍太郎さん（環境情報学部4年）だ。2002年、高橋恭子（特別招聘教授）研究室で行った市民テレビ局に関する研究が湘南TVの発想のもとなつた。ふだん身近な地域に問題があつても、

それを市民が上手に伝えて共有する手段がない。湘南TVプロジェクトはそんな手段、新しいメディアを作るという野心的なスタートをきつた。

なぜ映像か？

では、映像を表現の手段として得て、市民ディレクターはどんなメッセージを発信しているのか。

「私はトイレについての映像を作ろうと思ったんです。いつも乗るバスか

う語る。題材をどうしても表現して伝えたいという思いをカメラが後押ししてくれて対話が始まる。それに加え映像制作は複数での共同作業であり、企画段階や撮影現場でも人が交流する。このように撮影現場で人とのつながりが生まれ、その完成映像を見る前にすでに伝えたいメッセージの共有がある。映像は自然に人と人のつながりを滑らかにしてくれる潤滑油でもあるのだ。

こうした作品の多様性を支えているのが、湘南TVならではの講習会「市民ディレクター講座」である。石元さんはこう言う。「自分なりの題材があって、しっかりした切り口がありさえすればもうそれで作品になるし、面白いのだ」ということ。そういうことをまず教えたかつたんです」。かくして、視点の違う色とりどりの作品が集まつた。

「映像を制作するようになつて視点が変わりました。今まで気づきもしなかつたことに興味を持つようになつたんです」と前述の藤井さんは語る。映像を用いると、言葉では伝えられないことが伝えられる。その可能性を意識して、市民ディレクターは新しい物事の見方を発見したのだ。

では、映像を表現の手段として得て、市民ディレクターはどんなメッセージを発信しているのか。

「私はトイレについての映像を作ろうと思ったんです。いつも乗るバスか

らとんがつた屋根の建物が見えて、何だろうと疑問に思つていましたから」と語る市民ディレクターの藤井律子さん（主婦・62歳）は、身近な疑問から作品づくりをしている。そうかと思えば、鎌倉に残る自然の山「台峰」を守るために活動に焦点をあてている川瀬俊一さん（経営コンサルタント・62歳）のようなタイプもいる。インターネットショッピングの詐欺について警鐘を鳴らす映像、生涯教育のための地域の活動拠点を紹介する作品もある。このようにいふとも地域的なものから、個人的な興味を重視したものまで、作品のテーマはさまざまだ。

こうした作品の多様性を支えているのが、湘南TVならではの講習会「市民ディレクター講座」である。石元さんはこう言う。「自分なりの題材があって、しっかりした切り口がありさえすればもうそれで作品になるし、面白いのだ」ということ。そういうことをまず教えたかつたんです」。かくして、視点の違う色とりどりの作品が集まつた。

「映像を制作するようになつて視点が変わりました。今まで気づきもしなかつたことに興味を持つようになつたんです」と前述の藤井さんは語る。映像を用いると、言葉では伝えられないことが伝えられる。その可能性を意識して、市民ディレクターは新しい物事の見方を発見したのだ。

では、映像を表現の手段として得て、市民ディレクターはどんなメッセージを発信しているのか。

「私はトイレについての映像を作ろうと思ったんです。いつも乗るバスか



「参加している人が面白い、だからまた来てしまう」

エキサイティングな企画会議



多様な人が集う湘南TVの活発な運営会議の風景

湘南TVでは市民ディレクターの作品の企画をプラスシユアップするための映像企画会議が開かれている。この会議は非常に刺激的で、発見が多いのだそうだ。参加するのは市民ディレクター、外部から招かれた映像制作の専門家、そして地域の有識者等々。市民ディレクターが制作前の映像の企画についてプレゼンテーションを行うと、それを受けてより良い作品にするための議論が始まる。10代から60代までの幅広い世代の人々が参加するため、映像の受け取り方もそれぞれに異なる。それが面白いと石元さんは言う。

「たとえば10代の若い人が子供に夢を持たせるにはどうすればいいかとい

うテーマをプレゼンテーションするところが一方には戦時中は夢なんなかつたと語るおじいさんがいる。その感覚の違いがものすごく面白い」。市民ディレクターの一人、森智子さん(主婦)は湘南TVの種々のミーティングが何よりも楽しいという。「参加している人がとにかく面白い、それでまた集まりに来てしまう」とうれしそうに語ってくれた。ふだん味わうことのできない楽しさを学生だけでなく、地域の人たちも味わっている。

湘南TVにとっての将来

湘南TVは、これまでに3回ほど市民ディレクター講座を開き、一般の人々を招いての作品の上映会やウェブでの公開を行なってきた。現在では、湘南TVのウェブサイトのアクセス数も上昇し、メールによる反響もある。今後は地元のCATVでの放送を視野に入れて、映像制作と発信を積極的に行なっていくという。映像配信チャンネルとして軌道にのつてきたプロジェクトではあるが、その未来の活動範囲は映像制作だけに限定されない。

「映像を撮る上で、地域の情報がいっぱい集まっていることは重要。必ずしも作品作りだけに関わるのではなく、いろいろな人がいろいろな形で参加してくれる」ということが大切。その仕組みを作っている」と、運営委員の鳥海

希世子さん(環境情報学部4年)は言つ。湘南TVは、地域や今の社会のあり方に関心をもつ個々人が集まる場を作っている。たとえば、今までも湘南TV以外の人が持ち込んだ題材を、市民ディレクターが映像化する場面もあつたといふ。たとえば、このプロジェクトが目指しているのは、市民や学生、社会人すべてをつないでいく広いネットワークを築くことにあるように思える。これが湘南TVの目指す地平なのではないか。

「何かをしたいと思つたら、結局ものをいうのは個人のネットワーク」。石元さんはそう力強く語る。市民ひとりひとりがあくまで個人でありながら社会的絆にも恵まれるととき、もつと楽しい体験ができる、そう言いたかつたかもしれない。

湘南市民テレビ局について

正式名称：湘南市民テレビ局
通称：湘南TV（湘南テレビ）
住所：〒252-0804
神奈川県藤沢市湘南台2-5-10
湘南台ウエストプラザ五番地3F
SFC PLAZA
連絡先：湘南市民テレビ局運営委員会
info@shonan.tv
ウェブ：<http://www.shonan.tv>



孫福 弘

総合政策学部教授兼政策・メディア研究科委員
専攻：大学経営論、大学改革論

世界を 変える！ 変える！ SFCは地域にどう関与していくべきか？

編集部では、SFC生の地域活動を8件取材したのち、
大学経営の専門家である孫福弘総合政策学部教授にコメントを求めた。

「特に、学生の地域への参加をどう位置づければよいのか？」

編集部員が現場で得た見聞および実感が、

SFCの初代事務長でもあった孫福教授の知見に出会い。

「学生の活動って見えにくいんだよ」

編集部 今回取材した活動は、動機や目的において、また方法や形態において、実にさまざまです。共通点を探しても、主体がSFCの学生であるっていうことしかないように思います。そこで、「SFC生らしさ」、「SFCの学生ならではのやり方」ということを考えたいのですが、まずは、他大学の学生はどんな地域活動をしているのかお聞きします。

孫福 専門家とはいえ、そういう情報は私のところにもなかなか入つてこないんだよ。やっぱり基本的に、学生がやってる活動っていうのは、情報としてあまり伝わってこない。大學関係の情報として入つてくるのは、大学当局が言つてることとか、大学の教員がどういう活動してるってかっていうこと。学生の活動が情報として蓄積されないことは、日本の大学の悪いところかもしれないね。

（編集部） 大学論を専門とする先生にも見えてこないとなると、

一般的な教員や職員の目にはなあさうでしょうね。今回、大学当局が学生の自主的な活動をどう捉えているのかということ

も伺いたかったのですが、学生の地域参加を全体として把握

できていない状況では、位置付けもできないのでしょうか。

今後それを解決していくために、どのような方策が考えられるのでしょうか。

孫福 どう捉えるかはともかく、学生の自発的な活動がたくさん出てくるのはすごくいいこと。それを大学当局が統制するというのは、現状では必要ないし、すべきではないと思う。ただ、交通整理はしてもいいかも知れない。例えば、SFCから地域に展開している活動のアーカイブのような機能が、どこかにあつたらいと思う。今は消滅してしまった過去の活動も含めて、情報の収集と発信をする情報センターのような場所だね。それがあれば全体が見えてくるし。しかも、その情報は地域の人に向けては一種のPRの場になつて、学生の活動に興味を持った人への情報公開にもなる。ほかにも、イベントの告知や、ルーチンフルティン・ボードというか、そういう双方の意見交換機能があつてもいいかな。とにかく現状では、「学生たちが地域との間でこんな活動をこれだけしてるんだよ」っていうのが、誰にも把握できていないからね。

（編集部） たしかに、取材した活動のうちにも、学生が入れ替わった結果、地域住民の側から見て、コミュニケーションが取りにくくなってしまったという例があります。取材を通して、学生側と住民側双方の熱意や「思い」が、学生たちの活

「情熱」はあくまで必要条件

（編集部） 学生の活動に特有の問題とは何でしょうか。また、

動を面白くする、活性化する力だと強く感じました。しかし、制度化することのできない個々人の「思い」に頼っているだけに、理念の継承と活動の継続性の問題が、学生の活動には常に付きまとうのでしょうかね。

孫福 情熱は不可欠なんだけれども、それはあくまで必要条件であつて、十分条件ではないよね。じゃあ十分条件は何かっていうと、それはたくさんの必要条件を全部足したところにある。そういう必要条件のなかで、重要なのはやっぱり方法論とか技術みたいなもの。それがない、情熱だけあつても空回りしてしまう。そして、方法論とか技術みたいなものというのは、小手先のテクニックだけじゃない。人とのコミュニケーションとか、プロジェクトの動かし方とか、ある意味では高度に知的なものが多く含まれんだ。

編集部 この場合、どのような方法論が考えられますか。

孫福 まだ、ノウハウとして確立したものはないよね。ただ、モデルとして考えられるのは、学生主体の活動のうちで、大学なり教員なりが授業の枠組みの中で仕掛けているものかな。「生活者の社会参加」もそうだし、教員と学生が一緒になって活動を立ち上げてる例がSFCにはたくさんあって、これは一つの特徴として、積極的に見ていいことだと思う。もちろん、学生たちがサークル活動の感覚で自発的に地域と関わっていくのも大いに結構だし、評価できる。だけど、教員や大学当局が裏方として働き、プロジェクトをするものが、今よりもっと増えてもいい気がするね。科目としての研究会(=ゼミ)だと、担当教員が大学に残るから、ある程度継続性も保てるよね。あくまで現場で主体になるのは学生で、教員・大学当局がそれを裏でサポートする、そんなスタイルの活動が今までもけつこう存在するし、のFCらしいものではないか。

編集部 湘南TV、JUMP、イルミネーション湘南台も、当初は研究会の活動でした。コトバノアトリエの場合、SFCの加藤文俊助教授が顧問です。学生による純粋に自発的な活動と単純に比較するわけにはいきませんが、少なくともこれらの活動は、かなりうまくじつっている印象がありますね。

孫福 もう一つは、さつきも話した、学生の活動の情報を蓄

積したアーカイブ。それがあれば、過去の活動のノウハウも保存されるし、ある活動を「新しい」と思つて始めたところ、実は前にも同じようなものがあった、というようなこともなるよね。

学生こそが最先端

編集部 SFCはもともと、既存の学問領域に囚われない研究・教育を理念として掲げ、外部へのアピールという観点でも、いわばそれを「ウリ」に大学としての差別化を図っています。しかし、2003年のORF(SFC Open Research Forum)を見ても、13年間の蓄積で獲得した強み、例えば電気自動車など目に見える技術を外部に呈示することで差別化を図るという方向へ、少しずつ向きを変えているのではないかという気がします。すでに認められた強みを生かすという戦略は、既存の特定の研究領域に閉じこもってしまう危険も秘めていると思います。それに対して、今回取材したような学生たちの自主的な活動は、現場で見つけた「問題」を取り組んで、実践的に試行錯誤しながら「解決」策を模索していく点でまさに、SFCが提唱する「問題発見→解決」型の知性を育む場になつていてると思います。

孫福 SFCは、他のキャンパスと比べれば、既存の学問領域を横断し、既存のパラダイムから脱却することの必要性に理解のある人たちが多く集まって、いろいろと革新的なことをやってきたわけだ。それでも、やっぱりまだまだキャンパスに依拠する教員中心の組織で、従来型の教育や研究を引きずつている面はある。学者の立場だと、どうしても学界の中で評価されることを一番に考えてしまったりね。その点、学生は比較的自由な存在なんだよ。そう考えると、じつは学生こそが最先端なのかもしれない。

学生と地域の関係、もっと面白くできる！

編集部 先ほどご指摘のあった、研究会をベースとして学生と教員が共同で地域参加の活動を立ち上げるという方式が、その一例でしょうね。

学生の地域参加活動に対して、強制や管理は必要ない。ただ、地域とのよりよいコミュニケーションを生み出すための環境作りには、まだまだ改善の余地がある。そこに力を入れることによって、学生たちの中に、地域住民の中に、今はまだ半ば眠っているであろう「世の中を変えたい」というアツい思いを、これまでにも増して豊かな成果に結びつけていくことができるかもしない。SFC生と地域の関係は、もっともっと面白くできる——本誌編集部では、今回の特集取材を通して、そのような手応えを強く感じた。

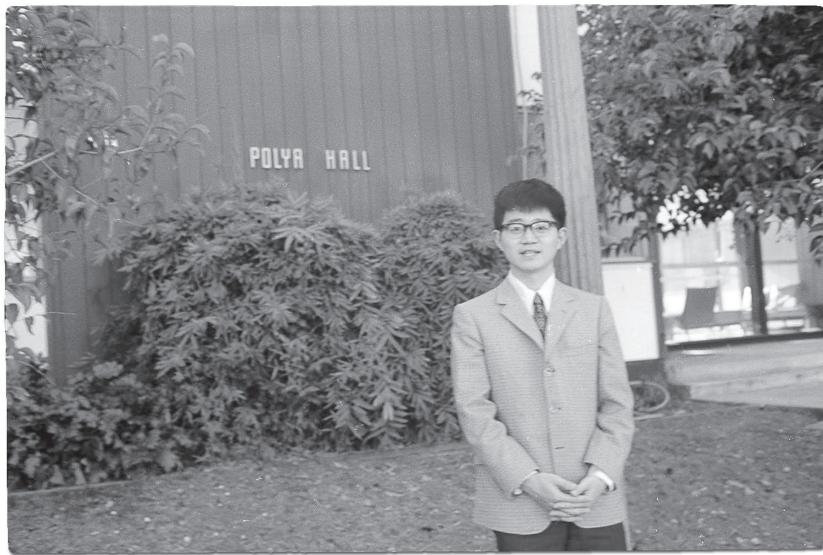
編集部 学生はこれまで、大学への働きかけを怠ってきたのでしょうね。ただ、取材で得た印象では、学生から大学への働きかけというのはなかなか起きてこないのでないかと思います。なぜかと言うと、学生たちの多くは、地域に貢献する活動をしながら自分たちが経験を積み、ノウハウを蓄え、社会に出て行ければ、それでいいと思っているからです。例えば、先ほどお話をあつた情報センターにしても、今後作っていくとしたら、どういう機関が担うのがいいでしょうか。やはり、学生がイニシアティブを取るのがいいのでしょうか。

孫福 僕は、理想を言えば、学生が率先して行動するのがいちばん望ましいと思うけどね。とはいっても、そこまでやるのはたいへんだろうね。ここまで、僕は学生たちの地域活動を非常に褒めて、「いい」って言つてたけれど、実態はたぶんそんなにいい場面ばかりじゃなくて、うまくいかない場面もあるんじゃないかなと思うからね。活動を担つてはみたけれど、地元の人たちの感謝とか評価とかがはつきりしなくて、役に立つてはいるっていう実感を得られないこともあると思うね。だから、学生は学生、大学当局は大学当局と完全に分けてしまふ考え方 자체を変えて、共に協力し、協働していくべきだと思います。

孫福 もう一つは、さつきも話した、学生の活動の情報を蓄

When I was young

学生にとって教員は近いようで遠い存在である。だがそんな教員にも若かりし頃、学生だった時代があった。教員たちはどのような学生時代を過ごしたのだろう。そしてそれはその後の人生にどう影響を与えたのだろう。このシリーズでは、学生時代の体験を中心に、教員たちの人生のターニングポイントを探る。連載第10回目の今回は有澤誠環境情報学部教授に話を聞いた。



スタンフォード大学留学時代

有澤 誠（ありさわ まこと）

課題のプログラムの中に大好きなパズルの
プログラムをこっそり入れて（笑）

有澤誠

コンピュータとの出会いといえば、大学3年の専門課程から、コンピュータは必修だったと思うな。そこで普通はコンピュータを使うチャンスがないんだけども、我々は使わせてもらえたわけですよ。今から思うと本当にちやちなコンピュータですね。当時は、データの出入力は穴を開けたパンチカードみたいな紙テープを読み込ませるんだよ。しかも、その紙テープには私たちは触させてもらえないのよね。データやプログラムを紙に書いて、計算センターに渡すと、パンチャーが打つてくれて、実行して返してくれる。それを見て、データやプログラムを直してパンチャーに渡すと、また返ってくる。だから1日かかるんだよね。出してから戻ってくるまで。そんなことを繰り返すわけだから、課題しかこなせないわけ。
そこで、私はね、課題のプログラムの中に、パズルのプログラムをこっそり入れておいて（笑）、知らん顔して出していくんですよ。パンチする人には分からぬからさ（笑）、パズルの結果も出でくるようにしてあること。先生が気づいたかどうかは知らないけども、叱られたことはありませんでしたよ。そんなふうにコンピュータを使って、好きなパズルのプログラムを書いた覚えがあるね。罪のない遊びですよ。

学園祭になるとね、もうちょっと本格

的なパズルを書きました。その時はアセンブラーというか、機械語だね。いきなり紙テープじゃ書けないから、一度アセンブルで書いておいて、手で機械語に直して、紙テープを自分でパンチしていく。そのときは紙テープを自分でパンチしましたから。でも、そうやって楽しんだからこそ、いつのまにかコンピュータの世界にめり込んだんだろうね。

新しい道具つて新鮮で面白い。これを使うとどこまで行けるんだろう？ と思って

私がとつてのコンピュータのいちばんの魅力は、あの、新しさ。大好きな科学をやるために新しい道具つてところでしたね。まさに、紙と鉛筆だけでやるもんだったと思っていたことが、違うメディアができるつていうのはすごく新鮮で面白かった。それまではパズルだって本当に頭と手で解いていたわけじゃないですか。それが部分的にコンピュータも使って解けるとなると、能力が拡がる。だからスタンフォード大学に進んだときも、人工知能の方へ行つたわけですよ。どこまで行けるだろう？ と思って。

そもそもアメリカに行こうと思つたのもね……、私つて、学部を出ていきなり研究所行つたんですよ。当時、学部卒の研究員つていたことはいたんだけどさ、やっぱり少数派は少数派なんだよね。で、見ているとね、大学院で習つたことと違う研究をしていても、大学院にいた人つていうのはそれなりのものを持っていることが分かるわけ。大学院で研究したこと自体が役に立つてゐるわけではないんだ

よ。でも、研究方法、研究で習得した手法が役に立つてゐるんだよね。そこはもう、つくづくそう思いました。予備知識の点では学部卒の我々とそんなに違わないと、いつのまにかコンピュータの世界にめり込んだんだろうね。

いちばん進んでいる、アメリカの大学。しかも博士課程に行きたいと、で、博士課程に入れるんですね、アメリカの場合は。日本だと修士号をもつてなきや、博士課程進学はふつうダメでしょ。向こうは入れるんですよ。

ハイロード・ローロード

当時は、人工知能の研究つていうと、人間ができるとこをコンピュータがどこまでできるかを探求するつていう、そういう意味だった。現在のとはちょっと違う。もっと純粋な人工知能たつたわけですよ。そういう純粋な人工知能に私は興味持つっていました。そうじゃない人ももちろんいて、もっと実用的に、お金儲けするのに使えるのじやないかって考える人もいたと思うんですね。私はそうじゃなくて、人工知能の王道というのかな。

当時は「ハイロード・ローロード」って言つたんですね、「高い道、低い道」って。低い道つていうのはとにかく実益。

その時代のコンピュータに可能な最大限の実益的応用を考えようという行き方。そうじやなくて、もっと純粋に知的な面白さに夢中になるのがのがハイロード。2年間大学院にいた彼らにはちゃんと身体感して、私も大学院に行きたいなと思ったんだよ。でも、いったん研究所について、元の大学へいくのは今さらという気がした。行くならやっぱりあの、アメリカの大学ですよ。コンピュータがいちばん進んでいる、アメリカの大学。追求する、私はそのハイロードを目指していました。

これが有澤流、朝型の勉強法
やりたくてしようがないから集中できる。

朝型。これ、有名なんですよ、私の勉強法。学生時代からずっとそう。朝起きて、勉強や仕事なりは午前中にすませる。午後は、翌日のための準備はするけれど、準備しかしない。本当はやりたくてもやらぬで我慢する。で、早く寝てしまう。そうすると朝起きると、やりたくてしようがなくなっているから高い集中力で勉強できる。これが朝型の勉強法です。絶対にこれがいい。

午後にいつつい調子に乗つてやるとね、一見いいように思うけど、だめなんです。午後は、頭の中での構想の時間。だいたいさ、プランニングするほうが楽しい。午前中はひたすらガーッとして、実際やるときはそれほどでも、つていうのあるじゃないですか。旅行するときなんかも、プランのほうが楽しいですよ。ああしたい、こうしたいなんて思って突っ走る。こういうのが私の勉強のやり方です。これは本当にいいから、私、学生にも勧めているわけ。授業中にも言ったんだよ、何度も。そうしたら、何人かの学生は、とても参考になりました

つてメールくれたんだけども、大部分の学生はさ、『何言つてるんだ』とか言つて(笑)『そんなこと言つたつて、夜やるほうが効率上がるよ』って、相手にされなかつた。

だから、私はもちろん残留だの、徹夜だのつてことは勧めていません。私は24時間キャンパスつてのはよくないって、ずっとと言つてゐる。9時から5時までキャンパスにして、夜はゆっくり休んだほうがいいって、学生に言つてゐるんだけどさ、聞いてくれない(笑)。今度、教員プロフィールに、朝型生活のススメって書こうかなあ。絶対これ、健康にいいですから。記憶力とかも朝のほうがよくて、前の晩寝ていれば絶対そのほうがいい。これを私はぜひ勧めたいんだけどね！



有澤 誠 (ありさわ まこと)

環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員
1967年に東京大学工学部計数工学科を卒業し、通産省電総研の研究員となる。その後、在職中にスタンフォード大学大学院博士課程に2年間籍をコンピュータ科学を学ぶ。SFCに赴任してからは、コンピュータ科学、コンピュータ科学、交通運輸情報論を専門とした研究を行なっている。
学生時代からパズルが好きで、蒐集や新しいパズルの出題をしてきた。授業でもさまざまなパズルを公開しており、それを自目当てで授業をとる学生もいるほど。「パズルのおもちゃは2つ買なことがありますよ、実際遊ぶものと、壊して仕組みを調べるためにね」



L'air d'un pays lointain

異国の風

第6回
セネガル
小さな村にて

自分の知らない世界には、発見と驚きが多く詰まっている。この企画では、外国を訪れたSFC生がどのようにその土地を捉えたのかを取り上げる。第6回の今回は2003年の夏休みに奥田敦研究会、及び山本純一研究会のフィールドワークとして、個人でセネガルを訪れた阿毛香絵さん（総合政策学部2年）に話を聞いた。約1ヶ月間セネガルに滞在した阿毛さんは人生観が大きく変わるほどの体験をしたという。



手厚い歓迎を受ける阿毛さん

阿毛さんが最初にセネガルに降り立ったときの印象は、なぜか「なつかしい」というものだったという。人類癡祥の地とされるアフリカは、私たちの遺伝子の中にある遙か昔の記憶を呼び起こすかも知れない。

前大会の覇者フランス代表に勝利し、話題になったのは記憶に新しい。フランスから約4時間の空の旅を終え、

アフリカの最西端に位置するセネガルは、人口約950万人、日本の約半分の広さを持つ共和国である。この国では人口の約95%をイスラム教徒が占めている。2002年FIFAワールドカップの開幕試合でセネガル代表が

なぜか、なつかしい感じがする…

セネガルはかつてフランスの植民地だったことから、フランス語が公用語として使われており、植民地時代に首都だったサン・ルイの街並みにはフランス植民地支配の名残が色濃く残っているという。首都ダカールは西アフリカ有数の大都市であり、欧米化が進んでいる。

日本人は住みやすい?

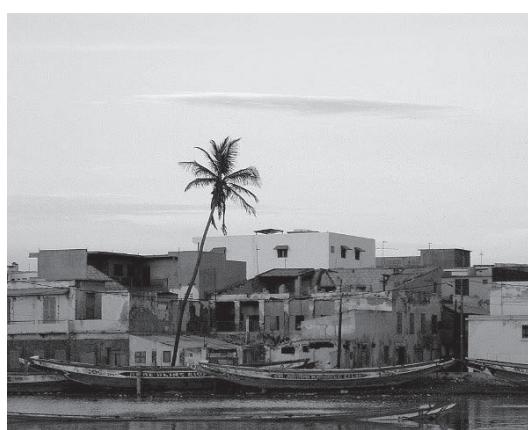
セネガルでは一般の人々でも日本についてよく知っていて、とても親切的だそうである。またセネガル人には「テランガ」というもてなしの気風があり、外国人に対してとても友好的である。阿毛さんは知り合いに紹介してもらったセネガル人の家にホームステイしていたが、彼らはとてもフレンドリーで、手厚く歓迎してくれたという。日本人にとって物価も安く、住みやすい国だろう。

フィールドワークのために一週間ほど村にも滞在した阿毛さんは、そのときのことと思い出して一言、こう語った。「すごく幸せだったんですよ」。水は井戸から汲み上げなければならぬし、電気はなく、夜は口ウソクの火を明かりにしていたが、そのシンプルな生活の中に、近代的な日本の生活では決して味わうことの出来ない幸福があつたという。セネガルの人々は米を主食とし、魚や羊肉、

キーワードはマラブーとバイファル

セネガルはイスラム教国であるが、スルーフィズム（神秘主義）などの影響を受けたため、本来のイスラム教とは異なる独特の面がある。そのキーワードとなるのが「マラブー」と「バイファル」だ。

マラブーはセネガルにおけるイスラム教団の高位の人、聖者を指す。19世紀末にセネガルにイスラム教スルーフィズムの流れを汲むムリッジ教団を興したアーマド・バンバという人物は伝説のマラブーと呼ばれており、ムリッジ教団のマラブーの多くはバ



サンルイの風景

ガルは、セネガルの文化は「鉢僧」である。彼らは、セネガルの文化を伝えるという面においては、バイファルは大いに活躍している。一方で彼らの一部は、セネガルの音楽やダンスなどの文化を伝えるという面においては、セネガルの多くの人々は「鉢僧」である。彼らは、セネガルの文化を「定職」についていることが多い。しかし、セネガルの音楽やダンスなどの文化を伝えるという面においては、セネガルの文化を「定職」についていることが多い。彼らは、セネガルの文化を「定職」についていることが多い。しかし、セネガルの音楽やダンスなどの文化を伝えるという面においては、セネガルの文化を「定職」についていることが多い。

生涯にわたつて重要な存在であり、マラブーのおかげで生きてゆけるという考え方も、宗派により程度の差はあるものの、かなり根付いている。サッカー選手でさえも試合の前にマラブーに相談することがあるという。

ンバの子孫や血縁の人たち、またその熱烈な崇拜者たちである。マラブーは地域の「ミミユニティ」の首長であり、そのコミュニティでは様々なことににおいてマラブーが影響力を持つ。子どもが生まれるとマラブーが名前をつける習慣があるため、セネガルの人々にとってマラブーは自分の名付け親であり、よき相談相手なのである。

生活を通じて、日本人は家族や周りの人たちを大切に思うようになつた。現代日本には個人主義的な考え方があり、自分ひとりの力で生きているのだと思いがちだが、セネガルのコミュニティのあり方を見て周囲の人たちのおかげで生きているということに気づいたという。



中心に座っているのがマラブー

物の流通基盤としての役割も果たしている。社会的集団としてはマイノリティに入るが、なかなか定義が難しく、その存在が謎だという。阿毛さんが興味を抱いたのは、まさにそこだった。

町を埋めつくす白と黒の人物像

「伝説のマラブー」などと聞くとロード・オブ・ザ・リングなんかに出てくる仙人のようなファンタジックな容貌を想像してしまうが、この絵で見る限りどうも見た目は普通だったらしい。

アーマド・バンバの直系の子孫であるマラブーに直接会うことはセネガルでは大変困難なこととされているらしい。それはちょうど日本で天皇に謁見するようなものだ。が、阿毛さんは幸運にも知り合いのツテによって会うことができたそうだ。その時の感想は、「優しいおじいさん」。どうやらバンバの子孫のマラブーはいい人らしい。

セネガルの町を歩いていると、町のいたるところの壁に奇妙な白い服を着た人物が描かれているのを目にする。一見落書きにも見えるが、そのあまりの数の多さに何か特別な意味が込められていることを誰もが感じるに違いない。そう、その絵に描かれている人物こそ、セネガルで

セネガルの人々の宗教観として、「この世は仮のものであり、どんなに貧しく辛くても、神をあがめて努力していれば必ず天国で第二の人生を送ることができる」というものがある。阿毛さんはそうした貧しくても生き生きと暮らしているセネガルの人々に、自分が見失っていた何かを気づかされたと言う。町中の壁に描かれた白と黒の人物の絵。この不思議な壁に囲まれた町には、私たちの感じたことのない風が吹いているのかも知れない。



壁に描かれたバンバ

27 | 連載 異国の風 第6回

HCD2003

KEIO SFC HomeComing Day 2003.10.11

2003年で2回目を迎える、SFCの恒例行事となりつつあるホームカミングデイ(以下HCD)は、爽やかな秋晴れに恵まれた10月11日(土)に開催され、多くの卒業者・在学生・教員でぎわった。当日の来場者は約620人。

03年のHCDのキーワードは"出会い"である。当日配られたパンフレットには「過去を懐かしむだけでなく、新しい出会いを生むきっかけ・場を皆さんに提供します」とある。スタッフはこの日のために、前年とは一味も二味も違うさまざまな企画を用意した。しかしHCDを実際に作り上げたのは、当日SFCに足を運んだ参加者たち自身だろう。

HCD2003の模様を、さまざまなイベントやエピソードの報告で綴ってみよう。



■ 残留届け

まず、参加者は総合受付で残留届けの用紙に記入をした。

「残留」は日本でもきわめて珍しい24時間オーブンのキャンパスならではの用語。SFC創立当初は、大学のレジャー・ランド化が問題視されていた時代でもあり、学生が大学で夜を徹して勉強することなど誰も理解できなかつたという。実際、深夜になつても帰宅しない学生の親から「うちの子は本当に勉強しているのか」との問い合わせが絶えなかつたという。

卒業生は久しぶりの残留届けに懐かしさを感じ、学生時代の残留の日々を思い出したことだらう。

当日の残留届けの提出は、思い出の再現イベントであるとともに、卒業生のデータベース作成のための資料を入手するためでもあった。さらに、卒業生は残留届けの本人控えを手に、HCD中はメディアセンターへも入館することができた。

■ 出会いの風船とイマココ

卒業後10年、「特に女性は誰だからわからない(笑)」という声が出るほど、卒業生は「立派」になって、キャンパスに帰ってきた。受付では入学年度別に色分けされた風船が配られ、この風船が終日、SFC生を繋ぐ役割を果たした。中には、藤沢の空高く舞つていく風船もあつたが。

また、イマココも活躍した。これは聞き

*注 RF-ID
Radio Frequency Identification

非接触個体認識技術
ICタグを使った無線通信による識別技術
ICタグへの育成アクセスが可能、商品の個体識別
が可能になり、物流サービスなどに大きなインパクトを与える。SFCでは、「Auto-ID・ラボラトリ」、
「自動識別に関するビジネス・社会モデル研究・ラボラトリ」にて先進的な研究がされている。

■ ホワイトウォール

総合受付前には長さ20メートルの真っ白なボードが掲げられた。卒業生も教員も在学生も、それぞれのメッセージや思い出などを書き込み、真っ白だったボードはたちまち色とりどりの言葉で埋め尽くされた。

「ただいま」、「おかえりなさい」というメッセージが交換される中、2003年HCD実行委員会代表である熊坂賢次環境情報学部長の「おかえりだなんて癒しはしないぞ、もっと走れ」という、卒業生を挑発し、さらなる飛躍を期待するメッセージも、白いボードに刻まれていた。

■ 託児所

ふだんのSFCではまず見かけない

なれない言葉だが、SFCならではの再会促進サービスだ。受付でイマココの登録を済ませ、RF-IDタグ(*注)を手に持つと、この日集まつた仲間の情報を、ただちに携帯電話にメールで届くという画期的なサービスだ。

風船もイマココも、HCD参加者の間を繋ぐ楽しいツールとなつた。

HCD2003

KEIO SFC HomeComing Day 2003.10.11

とのない光景もあった。ベビーカートの中で、不思議そうに辺りを見回したり、すやすやと眠っている子供たちの姿だ。HCDには、主婦になった卒業生はもちろんのこと、第一線で働く女性や、現在は産休中という女性も参加した。そんな卒業生たちのために、03年は託児所が設けられ、子供連れでも安心して楽しめるHCDとなつた。

後述するシータ館でのSFC Dialogueでは、子供が突然泣き出すといつしーんがあつたが、「こんなお話をもしろくないから泣いていいんだよ」と優しく声をかける教授の姿が印象的だつた。

■SFC開設当初を振り返る

SFC創立時は、メディアセンター（図書館）、シータ館、体育館は工事中。今でこそ学内を取り巻く豊かな木々も、当時は華奢に立ち並ぶことどまつていた、と第一期生は振り返る。

周りには何もない。情報を共有し、授業の相談をする先輩もいない。みんなで一から作り上げていく状況に置かれていた。一期生は、そのような状況下に置かれたかのうえリーダーシップが養われ、社会人となつた今、その力が役に立つているといつ。

一方、現在のSFCはどうだらう。一期生が経験した時代へ戻ることは当然不可能である。ならば、現在のSFCの生には何があるのか、とじつじつとが論点に挙がつた。

村井純環境情報学部教授は次のように語つた。

「確かに、一期生には何もなく、みんなで作つていつた。のSFCを出てどう評価されるかも分からぬ。義塾内高校からの進学者にしても、SFCで勉強を続けて将来どうなるのかと不安を感じていた」

そして、SFC第一回目の卒業式では、みんなが泣いていたという。何もないところから、何かを作り上げることができた、そんな感概だったのかもしれない。「先輩がいない、だから、自分が先輩になるう、とも思つてた。一から何かを作るというのも大事だけど、先輩と後輩が繋がることも大事だし、繋がりは独立独歩に匹敵する力だと思う。《一期生》のような畏れ多き先輩と同時に、ひとつ上の気軽に話せる先輩も今は学生は持つてゐる。悩みごと相談できる関係、それが宝だ」

村井教授の話に、会場からは深い共感が寄せられていた。

■SFC Dialogue

ホームカミングデイ最後のメインイベントは、先生と卒業生の「喋り場」、「SFC Dialogue」である。会場のシータ館には、カラフルな風船を手にした大勢の卒業生とSFCの先生方が一堂に集まつた。10年の節目を迎えたSFC三田会代表幹事の引継ぎが行われ、今後もさら

このイベントの冒頭、慶應義塾大学名誉教授で、六本木ヒルズ内に開設されたアカデミーヒルズの理事長である高橋潤一郎名誉教授が大きな拍手で壇上に迎えられ、挨拶を述べられた。

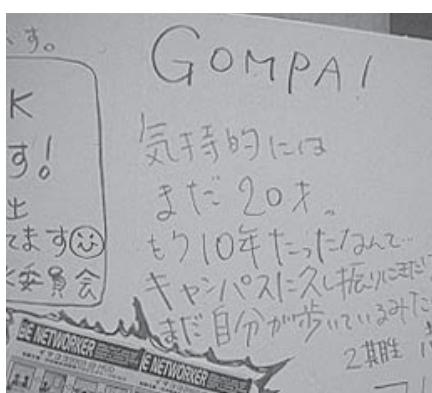
「今非常に関心を持っているのが、どうやつたら不特定多数の人間が固有名詞を持った形で付き合うことができるか、ということです」

このように切り出した高橋名誉教授は、現在の社会が、固有名詞を持つた人間として接し合わない社会であることを指摘した。たとえば、「コンビニエンストアやスーパー・マーケットでは、客は匿名の人間としてのサービスしか受けられない。従業員は、不特定多数の客に対してもマイニマル通りのサービスをするにとどまつて」

高橋名誉教授はこのことを象徴するエピソードとして、ある女性が、トイレに行きたいのだがどちらへと尋ねたら、店員は「いらっしゃいませ。大ですか、小ですか?」と答えたという例を紹介した。この話に会場は大爆笑。

「これはまさに不特定多数に対するマニュアルサービスの限界だと思ひます。これから時代は、ICOチップやセンサーで人間を識別するようになる。我々はお互いに不特定多数の付き合いをすることが強いられるのでしょうか、この流れに抗して、特定少數あるいは特定多数の付き合いを作つていかなければならぬのです」

いちばん大きな問題は固有名詞を持つた個人とどうやって付き合つていくか。



総合受付前に設置されたホワイトウォール。参加者ひとりひとりが、胸のうちを書き記す

いきなり重要な問題提起に、会場には緊張した空気が流れた。しかし、そこは活発なSFC卒業生である。すぐに会場の流れを自分のものとし、壇上にいる教授陣を「被告席に立たされているみたいだ」とたじるかせるようなさまざま質問を浴びさせた。

■ フットサルと花火、そして雨

フットサル大会も開催され、体育館は興奮と熱気に包まれて、熱い戦いが繰り広げられたことも報告しておこう。またSFCのイベントには欠かせなくなっている花火が打ち上げられた。空気

が冷たく張りつめている10月の空に上げられた花火は、HCDを締めくるにふさわしい輝きを放っていた。そしてHCDも終わりに近づいた頃、淋しさをあおるかのように雨が降り出してきた。参加者は正面階段に集い、記念撮影を行った後、また2004年度の再会を胸にSFCをあとにした。当夜の湘南台が、懐かしの店で旧交を温め合うSFC卒業生で賑わっていたのはいうまでもない。

HCDを通じて、改めてSFCの素晴らしさを私たち在学生も実感したのだ

HCDを作った人びと

■ 誰がHCDを作った?

600名以上の参加者を得て盛大にとり行なわれた2003年度のHCD。

当日足を運ばれた人は、キャンパスを訪れて最初に通ることになる大階段上の総合受付周辺に、オレンジの風船を付けた卒業生が集中していたことに気づいただろうか。次々と訪れる卒業生に、受付の学生としきりにやりとりをする姿も見られた。実は、これらの人々は、熊坂学部長の呼びかけに応え、HCD当日まで準備を進めて来た2期生たちだったのだ。一方、在学生側からも準備

の段階や当日スタッフで多くの人が動いた。

どんなイベントにも、準備というものはある。例えば、ホワイトウォールを設置したのは誰か? 椅子を運んだのは誰か? 飲食屋台を誘致したのは誰か? 考え出すと、表には出ない人々の力によってさまざまな仕事がなされていることに気づくだろう。

一体誰が、どうやってこのイベントを作りあげたのか? 第2回目を迎えた2003年のHCD、その舞台裏に迫る。

■ 縁の下の力持ち・HCDに至るまで

そもそもHCDは、2001年に

SFC事務室内に設置されたSFC卒業生連携協議会の活動の一環として、翌02年から始められた。初期スタッフは、

阿川尚之総合政策学部教授やHCD実行委員会代表であり、3期生でもある南政樹環境情報学部専任講師の呼びかけで、卒業生側、在学生側双方から集められた。第1回、第2回ともにHCD運営に関わった安井元規さん(総合政策学部4年)によると、03年は卒業生側からは2期生が50名ほど、在学生側からも60名ほどがスタッフとして関わった。そもそも60名ほどがスタッフとして関わったのである。在学生側の60名は、どこか一つの団体からまとめて出てきたわけではなく、初期メンバーの呼びかけに応えて、卒業生との関りに興味を持つ人がじわじわと集まってきたという。これだ

つたのだ。

安井さんは、準備の初期段階では、なるべく各スタッフと顔を合わせること



HCD2003

KEIO SFC HomeComing Day 2003.10.11



を心がけたという。現在、それぞれの生活を送っている卒業生たちに加えて、お互いに顔を知らない在学生が一緒に一つのイベントを作り上げるのだから、まずは顔を合わせ、話をし、お互いに何を考えているのかを知ることによって少しずつ信頼関係を築いていくしかなかつたのだ。そして、だんだんと信頼関係ができてくると、電話、メールでのやり取りによって具体的な準備が進み始めた。

そうして連絡を取りつつ、それぞれに

準備を進めていたスタッフが、本番前日に初めて一堂に会した。つまり、その日まで、中心人物を除くほとんどのスタッフ同士は初対面だったのだ。しかし、安井さんは、「この時期になると皆、『自分が何をすべきか』というのがわかりだして、的確に動くようになっていた」と言う。それまでの密な連絡のおかげで、お互いの役割を理解し合つており、前日は、風船の準備や椅子を運ぶ中で自然に仲良くなれたというのだ。

こうして5ヶ月の準備を経たHCDが、晴れて開催に至つたのだった。

■2004年、そして未来に向けて

安井さんは、卒業生・在学生の区別のない「意思や価値観のぶつけ合い」を「エキサイティング」と表現する。一人一人と話をし、お互いが何を考えているのかを知った上で、お互いを生かし合う適材適所を考える、そこにイベント

を作りあげる面白さがあるのだといふ。そして、2004年に向けては、「エキサイティング」な関係をより多くのスタッフが共有できるような運営を目指したいといつづ。

HCDは、卒業生の帰つてくる場所作りのイベントであり、卒業した後もSFCとの「つながり」を続けていくための場所作りでもある。しかし、卒業生と在学生との顔と顔を会わせた「ミニユニケーション」、コラボレーションという意味では、イベント当日だけではなく、準備の段階すでにひとつつの、密な関係が生まれていたのだ。つまり、HCDを「作る」段階で卒業生との連携は始まつているのだ。04年、第3回目のHCDを、誰が作ることになるのかはまだ分からぬ。しかし、そこでも新たな顔と顔が出会い、活発な連携、コラボレーションが生まれることだろう。

Co-net

Communication & Network ～未来をつくる卒業生たち～

最新情報の発信源：ファンシヨンエディター

第9回 益田史子さん

株式会社小学館勤務

1996年度 総合政策学部卒業



かつて「未来からの留学生」としてSFCで学んだ学生たちは、いま実際に未来を創り始めている。彼らはSFCで何を学び、今、何をしているのだろう？この企画では、そんな卒業生に社会での奮闘の様子を聞くとともに、学生時代の思い出やSFCへのアドバイスを語ってもらう。今回はSFC3期生（1996年度総合政策学部卒業）で、株式会社小学館に勤務し、編集者として活躍する益田史子さんにインタビューした。

【常に半歩先を見つめる仕事】

—現在、編集者として益田さんはどのような仕事をされていますか？

私は現在、「Oggi」（オッジ＝イタリア語で「今日」）という、20代後半の女性ファッション雑誌を編集しています。ファッションや美容に関するページの担当です。入社して7年経つけど、最初の5年間は大学生や若いOL向けの「CanCam」編集部にて、その後、女子高校生向けの「チチSeven」や、新雑誌「PS」を立ち上げました。

私の編集者としての仕事は、こんな感じ。まず毎月、企画を30本考え、それをふまえて編集長が「この号はこの特集で○ページでいく」という台割を決めます。担当するページをもらおうと、「絵コンテ」を異なる攻め方で2パターン描く。それらを上司にプレゼンして、方向性を決める。次はカメラマンやモデル、スタイルリストなどスタッフを自ら構成し、それらのブッキンや撮影場所の許可を取ることも私の仕事です。そして、撮影現場で最終的にOKサインを出すのも、編集者の私です。

仕上がった写真にキャプションや本文の文字数、見出し、タイトルの位置などを描いたラフなスケッチをデザイナーに渡す。きれいにデザインされたレイアウトがあがってくる。そして原稿を書き上げ、入稿。その後、校了を経てその号に関する仕事が終了するという感じです。編集者はその担当ページの中で、自由に世界を作ることができるか、すっかり楽しむ。

もちろん普段から常に、洋服や化粧品の最新情報

を集めなければいけません。シーズンに先駆けて行われるブランドメーカーの展示会に出かけ、どのようなアイテムが出揃うかを見て流行を判断します。情報を見極める、つまり常に半歩先を見ていなければならぬことも編集者重要な仕事です。

—編集者という仕事を選んだ動機は何ですか？

実はSFCにいた当時、マスクミは志望していました。学生時代は政治経済の勉強ばかりしていたので、金融系の企業を考えていました。出版社に行きたいと決めたのは大学4年生の5月頃。テニスサークルの先輩からの紹介で、ある出版社でアルバイトをした経験が決め手でしたね。はがきの整理といった雑用でしたが、出版社の雰囲気を知ることができたんです。編集者はみんな普段着で仕事をしているし、勤務時間もそれぞれが自由に決めているように見えました。それに、話題が豊富で、面白い人がたくさんいた。こういう場所で仕事をしたい、と思いましたね。

学生時代、自分はどういうふうに生きたいのかと考えたときに、現実の社会と人間に接してみたいと思ったんです。雑誌は社会の動きや流行に敏感でしょ。編集者はいろんなことに興味を持つて、日々変わっていく社会に接していられる。雑誌もひと月ごとに企画を変えしていく。そういう「変化」も面白くてこの世界へ飛び込みました。

【エディターといふ仕事の魅力】

— いの仕事をしてみてよかったです、つらかったと思つたことは何ですか？

この仕事で一番の魅力は、なんといつてもいろいろな人と会えることです。編集者といふ名刺一枚で、取材といふことで誰とでも会える。

新入社員の時「CanCam」の表紙の撮影で、当時大好きなキムタクに会えた！しかもインタビューした！！タレントにかかわらず、政治家でも、作家でも会いたいと思った人に会うことができるという仕事は楽しいですね。

それから常に最新情報を手に入れる事ができる

こと。私が携わっているのはファッション誌ですから洋服や化粧品などの情報ですが、新しい流行や人やものに最初に出会えるところなどは、この仕事なりではの魅力だと思います。そのせいか、若くられる…

そしてとくに女性に関して言えることは、出版社は女性がのびのびと働ける職場の気がします。もちろん出版社にもよるし、部署によっても異なりますが、女だからといって特別扱いはされない。そんな環境の中で、自分の仕事が雑誌という形になって現れる。世間に出て回る。そういう仕事を私は気に入っています。

辛いことは、本当に不規則な生活ですね。自分の健康管理が大変なことです。朝7時に帰宅、10時には撮影といったこともしばしば。40時間ずっと起きていた時は、もう氣力で生きていられなくな感じ…。でも楽しいからもあるんです。

【卒業に専念した学生時代】

— 学生時代はどのように過ごしていましたか？

ELCではフランス語関係ばかりやっていたかな。SAもしていたし、語学研修旅行のコーディネーターを務めたり、自分自身も頻繁に海外旅行をしていました。今の仕事でも、パリやミラノでのコレクションの取材などときにはこの経験が多少役立ちました。

フランス語の他には、EJH関係の経済を学ぶ研究会に入っていました。当時は特に初代総合政策学部長の

加藤寛教授や竹中平蔵教授の授業が好きでした。最前列に座って講義を聴いてましたね、追っかけのように。

【信頼のある雑誌作りを目指して】

— これからどのような雑誌にしていきたいですか？

学生の頃好きだった雑誌があり、「こうゆう雑誌を作りたいな」と思っていたのですが、実はあまり売れていない雑誌だったことが社会人になつてわかつたんです。内容、質が高くて売れないが、なぜ？

——つまり「いい雑誌は売れてる」とは限らないんですね。逆に低俗な内容でも売れてしまえば、OKな業界。

それが私の中ではジレンマですね。「Oggi」は内容もよく売れている、比較的稀なケースだと思います。私が作っているファッション誌は、多くの読者を対象にしています。ですからその発する情報の影響力はとても大きい。よく、読者から「Oggi」に載っていたからその商品を買いました、と言われます。もしその商品の品質が悪かったら、読者の怒りは商品のメーカーだけでなく、「Oggi」にも向けられ、信用は失墜

遊び、遊び、そして日々感動しよう！ という感じ。とりとめもなく一日を過ごそうと思えば過ごせるけど、その一日の出来事で何が美しかったのか、何がかったのか、何が面白かったのか、という気持ちをいつも持つてほしいと思います。そして、できるだけその気持ちを文章に書き留めておく。後で読み返すと、思いがけずそこに深いものを発見することがあるはず。気持ちを文章で表すことによって、感動の内容、意味、質をしっかりと掘むことができるんです。

これは社会人になつてから改めて分かったことなのですが、時事問題のみならず、ときには古典文学などに触れてみるのもいいと思う。様々なジャンルの本を学生のうちに読んでください。小説でも人文科学系の本でも、本を読む時、頭の中にその情景を想い描いていると思うけど、その「絵」がいかに描けるか、どれほど感情が描かれるか、ということはとても重要なことだと思います。つまり「想像力 USE YOUR IMAGINATION！」たくさん本を読んで心を豊かにして、楽しい学生生活を送つてください。

学生時代は、みなさんには選択肢も可能性もたくさんある。自分に限界を設けないで、湘南から広く世界を見てほしいと思います。

する。私たちは常に正確な情報を発信して、信頼性のある雑誌を作るよう心掛けています。

「CanCam」や「Oggi」などの雑誌を作っているとつげく思うのですが、これだけ不景気といわれているのに、ブランド物は売れちゃう。女性って貪欲なので歴史的に見ても貪欲。女のパワーって強烈で、それが今はお買い物とか消費行動に向けられがちだけ

ど、別の方にも活かされると、もっと面白い社会になると思うんですね。女性がいきいきと生きていってくれをしっかりサポートする雑誌にしたいです。

【たくさん遊んでたくさん学んでほしい】

— 最後に、SFCの学生に一言お願いします。

遊び、遊び、そして日々感動しよう！ という感じ。

ひとりめもなく一日を過ごそうと思えば過ごせるけど、その一日の出来事で何が美しかったのか、何がかったのか、何が面白かったのか、という気持ちをいつも持つてほしいと思います。そして、できるだけその気持ちを文章に書き留めておく。後で読み返すと、思いがけずそこに深いものを発見することがあるはず。気持ちを文章で表すことによって、感動の内



日々の感動を書き留めよう。

環境情報学部生のモラル度が最下位！？

SFC検証

File 04 : モラル度最下位って、どういうこと！？

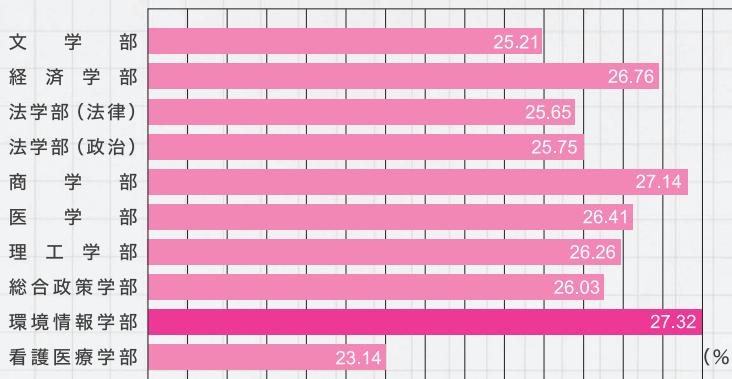


図1.学部間のモラル度比較

求められるデータの活用

SFCの三学部は、三つ子に喰えられることがある。しかし三者三様性格がまったく違うと報告する調査結果があるらしい。その調査結果によれば、環境情報学部は慶應義塾大学内で学生のモラル度が最も低い学部であり、総合政策学部は中くらい、看護医療学部は塾内で学生のモラル度が最も高い学部だという。

まずは、この調査にアクセスし、情報を確認してみよう。学部間のモラル度を確認してみよう。学部間のモラル度

を比較しているのだから、義塾全体に関与する機関が調査を行なったはずだ。SFCの事務室に問い合わせてみた。事務室で手渡されたのは、「慶應義塾大学学生生活実態調査報告 第21回 2002年度」と表紙に書かれた分厚い冊子。「学生生活総合センター」の発行物なので、作業の中心である日吉キャンパスまで出かけて内容を確認した。題目とおり、慶應義塾大学の全学部の学生に対する行なったアンケートらしい。

このような大規模な調査の結果として、「環境情報学部の学生はモラル度が最も低い」という結論が出ているのだから、驚きである。この調査はどのようない意図で行なわれたものなのだろうか。

そもそも、「学部間のモラル度比較」が企画されたのはいかなる経緯からだつたのか。

「三田キャンパスの学生が地べたに座っている、という発言が調査委員の一人からあつたんです」。2002年度の調査委員長を務めた井下理総合政策学部教授はそう振り返る。慶應義塾生らしからぬ、眉を顰めさせるような振る舞いや態度が目立つてきているのだ。すれば問題だ、一度、塾生のモラルについて、塾生自身がどのように感じているのかを調べよう、という話が調査委員会で持ち上がった。

SFCを巡るさまざまな疑問、謎を検証することのコーナー。今回は、本誌編集委員の桂山奈緒子と関口仁美が、「SFCの学生はモラルが低い」という風評を聞きつけ、その真偽を確かめるべく取材した。その過程で、学生生活の実態についてのアンケート調査を行なった井下理総合政策学部教授(2002年度の学生生活実態調査委員長)の協力を得た。また、岡部光明総合政策学部教授にもインタビューをした。

文責 本誌編集委員会

もちろん調査の狙いは、モラル度の

高い低いを、あたかも学業成績のように判定して人格を評価することではない。そうではなくて、調査結果を提示することによって、学生、教員、職員がそれぞれの立場から考えるように促そう

というのである。井下教授は、この調査結果から各自が問題を発見し、「よりよい大学生活を送るために何をすべきか」を考えてほしいという。調査結果はみんなが共有するデータであることを忘れてならない。事務室で求めれば、誰でも調査報告書を借りることができるのである。



あなたは容認できますか？

さて、問題の「学部間のモラル度比較」は、調査Q23の合計指標として提示された（図1参照）。他の学生のある行動をどれだけ容認できるかを、「気にならない」「許せる」「絶対、許せない」という三段階で回答させ、その集計の計測値を「許容度」としている。「気にならない」が多ければ、許容度が高いということだ。許容度が高ければモラル度が低く、許容度が低ければモラル度が高い、と解釈が可能ということになる。こうした測定法は操作的定義に基づくひとつ手の手法であるが、SFCでは時間割の都合上昼休みが短く、一部の授業で授業中の飲食が許されているから、授業中の飲食への容認度が当然高くなってしまうため、項目の合成指標である「モラル度」から、「授業中の飲食」は除外されている。

しかし、この配慮にも関わらず、環境情報学部の学生はモラル度が最も低いという結果が出た。トップの学部（同じSFCの看護医学部！）との差は

わずか4ポイ

023 あなたは他の学生の次のことについて、どのように考えていますか。それについて5段階で答えて下さい。

項目	1 絶対容認できない	2 容認できなない	3 どちらともいえない	4 仕方がない	5 かまわない 容認すべき
1 授業中の私語	1	2	3	4	5
2 授業時間の遅刻・早退	1	2	3	4	5
3 授業中の飲食	1	2	3	4	5
4 試験中のカンニング	1	2	3	4	5
5 空缶、吸い殻、ごみのポイ捨て	1	2	3	4	5
6 乱暴な言葉遣い	1	2	3	4	5
7 服装の乱れ	1	2	3	4	5
8 キャンパス付近への違法駐輪・違法駐車	1	2	3	4	5
9 授業中の携帯電話使用（通話）	1	2	3	4	5
10 授業中の携帯電話使用（メール）	1	2	3	4	5
11 禁煙場所での喫煙	1	2	3	4	5
12 キャンパス内の歩行喫煙	1	2	3	4	5

ントだが、しかし有意的と見られるその差は何に起因しているのだろうか。

調査報告の検証

学部間のモラル度を測る指標となつた、それぞれの項目の容認度グラフとともに、環境情報学部が最下位となつた要因を探つてみよう。以下はあくまでも、この記事を担当した二人の学生の仮説にすぎない。SFCでの実際の学生生活を参考に、調査報告を読み解いてみたのだ。一読していただきたい。

手始めに、環境情報学部の学生が全学部のなかでどのよう位置にあるのかを項目別に見てみよう。項目01「あなたは他の学生の【授業中の私語】について、どのように考えていますか？」に関しては、商学部に次いで容認度が高い。同じく項目02「あなたは他の学生の【授業時間の遅刻・早退】について、どのような考えていますか？」では法学部が最も高いです。では法学院治学科に次いで容認度が高い。

しかし、そのあとに続く、項目04【授業中のカンニング】、項目05【空き缶、吸い殻、ごみのポイ捨て】、項目06【乱暴な言葉遣い】、項目07【服装の乱れ】、項目08【キャンパス付近への違法駐輪】、項目09【授業中の携帯電話使用（通話）】、項目10【授業中の携帯電話使用（メール）】、項目11【禁煙場所での喫煙】、項目12【キャンパス内の歩行喫煙】に関しては、

環境情報学部も含めた全ての学部間で

際立つた差は見られない。

以上から、環境情報学部のモラル度を他学部よりも低いと判断させた要因として、項目01と項目02が浮かび上がつてくる。しかし、総合政策学部や看護医療学部との違いを考えると、最も影響が大きいのは項目02ではないかといふことになる。すなわち、環境情報学部生が他の学生の遅刻・早退に対して寛容であること——これが彼らのモラル度を下げる要因となつたのではないか。では、なぜ多くの環境情報学部生は、遅刻・早退に寛容なのか。

第一に考えられるのは、SFCの交通の便の悪さだろう。駅からバスを利用して通学している学生なら皆知つてはいるように、悪天候その他によって交通渋滞が起こると、駅から学校までの所要時間の見積もりがすっかり狂ってしまう。しかしこの条件は、総合政策学部生・看護医療学部生にとつても同じであるはずだ。

そこで次に考えられるのは、学部による科目履習条件の違いだろう。環境情報学部と総合政策学部に比べ、看護医療学部では授業にきちんと出席することが決定的に重要なのではないかといふことである。看護医療学部は必修が多く、いわゆる「落とせない」科目が多い。専門科目の性質からして、また、少人数での授業がほとんどであることからして、看護医療学部生は遅刻に敏

感であると考えられる。それに対し、カリキュラムのあり方が異なる環境情報学部では、学生が多少の遅刻を気にしないのではないか。しかし、これだけでは環境情報学部生と総合政策学部生の間の差を説明することができない。

結局、決定的な要因として考えられるのは、環境情報学部生のライフスタイルなのではないか。「学生生活実態調査報告」には学生の毎日の生活を統計的に報告する項目がある。それから浮いていたあとで就寝。そして朝は遅くに起きてのんびり登校、というライフスタイルが固定しているのではないだろ

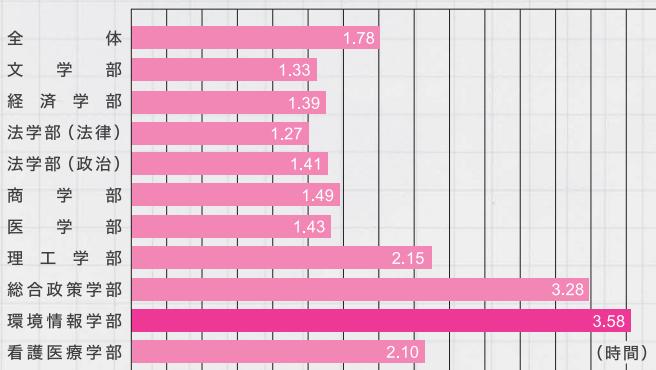


図2.授業がない日のコンピューターの平均使用時間 (Q25b-8から作成)

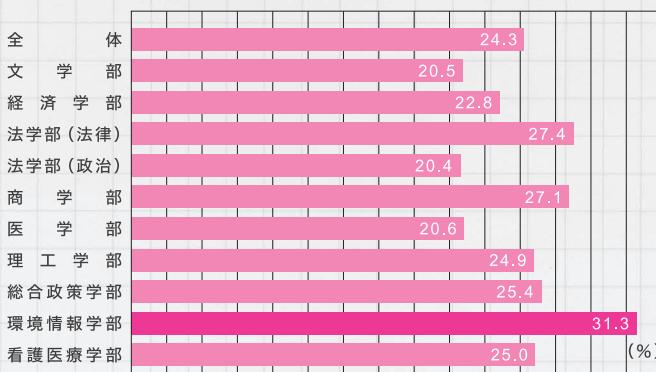


図3.授業がない日の午前2時頃に就寝する割合 (Q25b-0から作成)

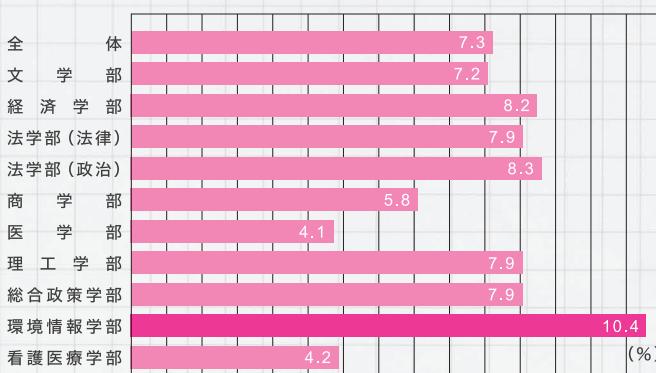


図4.授業がない日の正午頃に起床する割合 (Q25b-9から作成)

最も遅い(特に真夜中の2時、3時まで起きていることも珍しくない)というものだ(図3参照)。

「あなたの『授業のある日』の起床時間が平均何時頃ですか」という問い合わせで20パーセント以上の環境情報学部生が午前九時頃と答えている。『授業のない日』となると10パーセント以上が正午頃と答えており、かなり目立つ。また、『授業のある日』の就寝時間で最も遅い時間に回答が集まつたのは総合政策学部であるが、『授業のない日』では環境情報学部が午前2時で最も多くなつており、慶應義塾大学のすべての

学部のうちで最も遅い。情報学部生たちの場合、夜中に課題レポートの作成やメール連絡などを行ない、日付けが変わつても数時間は起きていたあとで就寝。そして朝は遅くに起きてのんびり登校、というライフスタイルが固定しているのではないだろうか。午前中の授業に遅刻しても構わない、仕方ない、という風潮が生まれている可能性が高い。「課題レポートさえ出していれば大丈夫」、「相手に直接会えなくともメールを出せばなんとかなる」といった甘えから、どんどん時間に

ルーズになっていく……。事実、教授たちから、環境情報学部の三、四年生にはレポートの〆切りが過ぎてから担当教授にメールで言い訳する者が目立つ、という声も上がつていて。このような声も上がつていて。このような甘えた態度や生活習慣が遅刻に対する容認度を上げ、その容認度の上昇がモラル度を下げる——という因果関係を読み取ることができる。

参考:慶應義塾大学学生生活実態調査報告第21回2002年度

さて、もう少し根本的なところを考えてみよう。前述のように、学部別に見た学生一般のモラル度比較では、トップと最下位の差はわずか4ポイントだ。つまり、学部間のモラル度は、大きな目で見れば似たり寄つたりともいえる。この調査結果を念頭に置きつつ、私たちは、

岡部光明総合政策学部教授に二、三の質問をぶつけてみた。岡部教授の専門は経済学であるが、教授はホームページ等を通じて、より一般的なメッセージをも学生に送り続けている。教授曰く、「モラルとはより普遍性が高い、倫理・道徳・生き方のことだと私は考えています。そして、それを具体的にした、態度・言葉・身の振舞い方などがいわゆるマナーなのです。こういった共通のルールがあることで、社会や組織が円滑に動くわけです」。

それなら、学生生活総合センターによる意識調査は、モラルではなくマナーを調べたにすぎないのだろうか。「そうではありません。ある人のモラルは、必ずといっていいほどマナーに反映される」という関係性があるのです。この調査は、具体的な質問をすることで、その奥にある学生のモラルを測っているのだと思います」。つまり、モラルの高い学生ならQ23の間にすべて否定的な返事をするにちがいない、というわけだ。歩きタバコをせず、授業に遅刻・早退せず、私語を

個性的・積極的・国際的であるためには、インテグリティが不可欠

慎み、ごみのポイ捨てをしない・確かに、このような学生ばかりなら、大学において気持ちがいいに違いない。「社会や組織が円滑に動くための共通のルールを大學に当てはめるとすれば、すなわち「互いにより良く勉強できる環境を保つためのルール」ということになるだろう。

そして、モラルを語る上で外せないキ

ーワードが、岡部教授によれば「インテグリティ」である。日本語にすれば、言動一致の心。教授は語る。「たとえどんなに素晴らしいことを言っても、そのとおりに行動していかなければ何の意味もありません。例えば、授業中にメールをするのはいけないと公言している人が授業中に携帯電話をいじっていたら、疑問を感じますよね？」

トでは『容認できない』に○をつけておきながら、自分がその行為を日常的にしているというようなことがないといふこと、それが最も重要なのです。耳の痛い人も多いのではないか。改めて問われれば、してはいけないことと答えるのに、教室で隣の友達とのおしゃべりに熱中したり、帽子をかぶつたままサンドイッチをおお張つたり……。よく見かける光景ではないだろうか。

「よく、SFCには国際性の高い人間が集まっていると言われますが、本当にそうでしょうか。インテグリティは国際性の重要な条件の一つです。いくら流暢に外国語が話せたとしても、インテグリティのない人間への評価は非常に低い

のです。SFC生のみなさん、世界に通用する人間であると自負するなら、自分にどれだけインテグリティがあるのか、胸に手を当てて考えてみてください」——これが岡部教授のメッセージだ。

真のSFC生を目指して

大学時代は、人生でいちばん自由を謳歌しやすい時期だといえよう。特にSFCの総合政策学部と環境情報学部では、カリキュラムをはじめ、さまざまなかで学生個々人の自由選択の余地が大きく、キャンパスに自由な雰囲気が満ちている。しかし、それに甘えて好き勝手をやるのはお門違いというのだ。個性的な人間とは、周囲に迷惑をかける人間のことではない。積極的な人間とは、自分の要求を無理に押し通す人間のことではない。そして、岡部教授の言うとおり、国際的な人間とは、ペラべラと外国語を話すだけの人間のことではない。

個性的かつ積極的、かつ国際的であろうとすればするほど、モラルやそれに伴うマナーを身につけていなければ話にならない。つまりSFC生は、多くの場面で当然、モラルある態度を期待され、要請されてしまうのである。さて、あなたには、真のSFC生である資格があるだろうか。

●編集後記

「Special Edition」と付された本号は、「メディアリテラシーB」の授業の一環として編集制作された。春期の同Aの授業では、受講した学生がまったくの初歩から「あおあお」と「do@r」という独創的な2冊の雑誌をつくりあげたが、今回も、21名の復習者が取材・編集・レイアウトの基本を実践で学びながら、その成果を「KEIO SFC REVIEW No.20」に結実させた。

私たちはいま、さまざまなメディア（新聞、雑誌、テレビなど）を取り囲まれ、それを通して情報を受け取っている。しかしメディアが、誰によってどのようなシステムでつくられているかを知ることは少ない。「メディアリテラシー」の授業の目的は、メディアの仕組みを知ることだ。そのことにより、私たちは批判的に情報を受信する術を身につけることができる。同時に情報の発信者になることもできる。本号の隅々から、発信者として情報の現場に立ち会った学生たちの興奮を感じられないだろうか。メディアの作法を身に着けつつある徵候だ。

編集幹事 門崎 敬一

【編集後記】

このSFC REVIEW 20号の編集作業を振り返ってみると、「どうやら僕はなにかモノをつくることが好きだ」ということを強く思います。それはモノが形になるにつれて、今まで自分たちがやってきたことは多くの人々の支えがあってできたものなのだということを実感できるからです。このSFC REVIEW 20号は、熱心に指導してくださった先生方、おそらく僕よりもはるかに多くの仕事をこなしてくださった副編集長のお二方、編集委員とステューデント・アシスタントの方々、さらには取材に協力してくださったすべての人たちの協力によってようやく1つの雑誌になりました。上記の方々には深く感謝し、御礼申し上げます。

編集委員一同、限られた時間の中でベストのものをつくるよう尽力いたしました。
私たちのSFC REVIEW 20号を楽しんでいただけたら幸いです。

編集長 北澤 嘉英

KEIO SFC REVIEW No.20 [Special Edition]

2004年2月1日発行

発行人 熊坂賢次

発行所 慶應義塾大学湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤5322

TEL. 0466-49-3437 FAX. 0466-49-3594

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

E-mail:gakkai@sfc.keio.ac.jp

制作・印刷

株式会社ワキプリントピア

〒252-0815 神奈川県藤沢市石川4-3-19

TEL. 0466-87-5811 FAX. 0466-88-6560

<http://www.printopia.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学湘南藤沢学会までお寄せください。

バックナンバー、年間購読をご希望の方は、

TEL. 0466-49-3437

FAX. 0466-49-3594

E-mail:gakkai@sfc.keio.ac.jp

までお申し込み下さい。

年間購読料は手数料を含め、合計1,800円です。

年間を通じて購読されますと年間200円の割引となります。

尚、発行回数は年4回（1月、4月、7月、10月）発行の予定です。

●メンバー紹介

■編集幹事

門崎 敬一（総合政策学部特別招聘教授）

■編集長

北澤 嘉英（総合政策学部1年）

■特集担当副編集長

小谷 吉範（総合政策学部3年）

■連載担当副編集長

桂山 奈緒子（総合政策学部1年）

■デスク

安井 元規（総合政策学部4年）

■編集

【特集担当】

石元 龍太郎（環境情報学部4年）

小谷 吉範（総合政策学部3年）

加賀 海渡（環境情報学部1年）

笠井 賢紀（総合政策学部1年）

北澤 嘉英（総合政策学部1年）

下村 元気（環境情報学部4年）

富澤 明子（環境情報学部2年）

内藤 薫（環境情報学部2年）

中澤 健太（環境情報学部4年）

松岡りょう子（総合政策学部1年）

村松 あすさ（総合政策学部1年）

元木 彩（環境情報学部2年）

横山 宗幸（総合政策学部1年）

吉岡 史恵（環境情報学部2年）

【連載担当】

〈When I Was Young〉

岩井 貴史（環境情報学部1年）

浦田 彩織（総合政策学部2年）

〈異国の風〉

北澤 嘉英（総合政策学部1年）

松岡りょう子（総合政策学部1年）

〈キャンパスへ帰ろう〉

小谷 吉範（総合政策学部3年）

加賀 海渡（環境情報学部1年）

元木 彩（環境情報学部2年）

吉岡 史恵（環境情報学部2年）

〈Co-net〉

朝倉 麻衣（総合政策学部1年）

普門 正浩（環境情報学部3年）

〈SFC検証〉

桂山 奈緒子（総合政策学部1年）

関口 仁美（環境情報学部1年）

〈make your campus〉

HAL-CURATION

（稻葉 佳之+坂口 祐祐）

■デザイン

岩井 貴史（環境情報学部1年）

神谷 久泰（環境情報学部1年）

普門 正浩（環境情報学部3年）

両角 未央（環境情報学部3年）

安井 元規（総合政策学部4年）

■カメラ

加賀 海渡（環境情報学部1年）

村松 あすさ（総合政策学部1年）

■メディアリテラシーB Student Assistant

加藤 純矢（総合政策学部4年）

和田 祥子（環境情報学部4年）

■湘南藤沢学会

KEIO SFC REVIEW担当

堀 茂樹（総合政策学部教授）

孫 福 弘（総合政策学部教授）

事務局

田坂 真美

KEIO SFC REVIEW 編集委員募集！

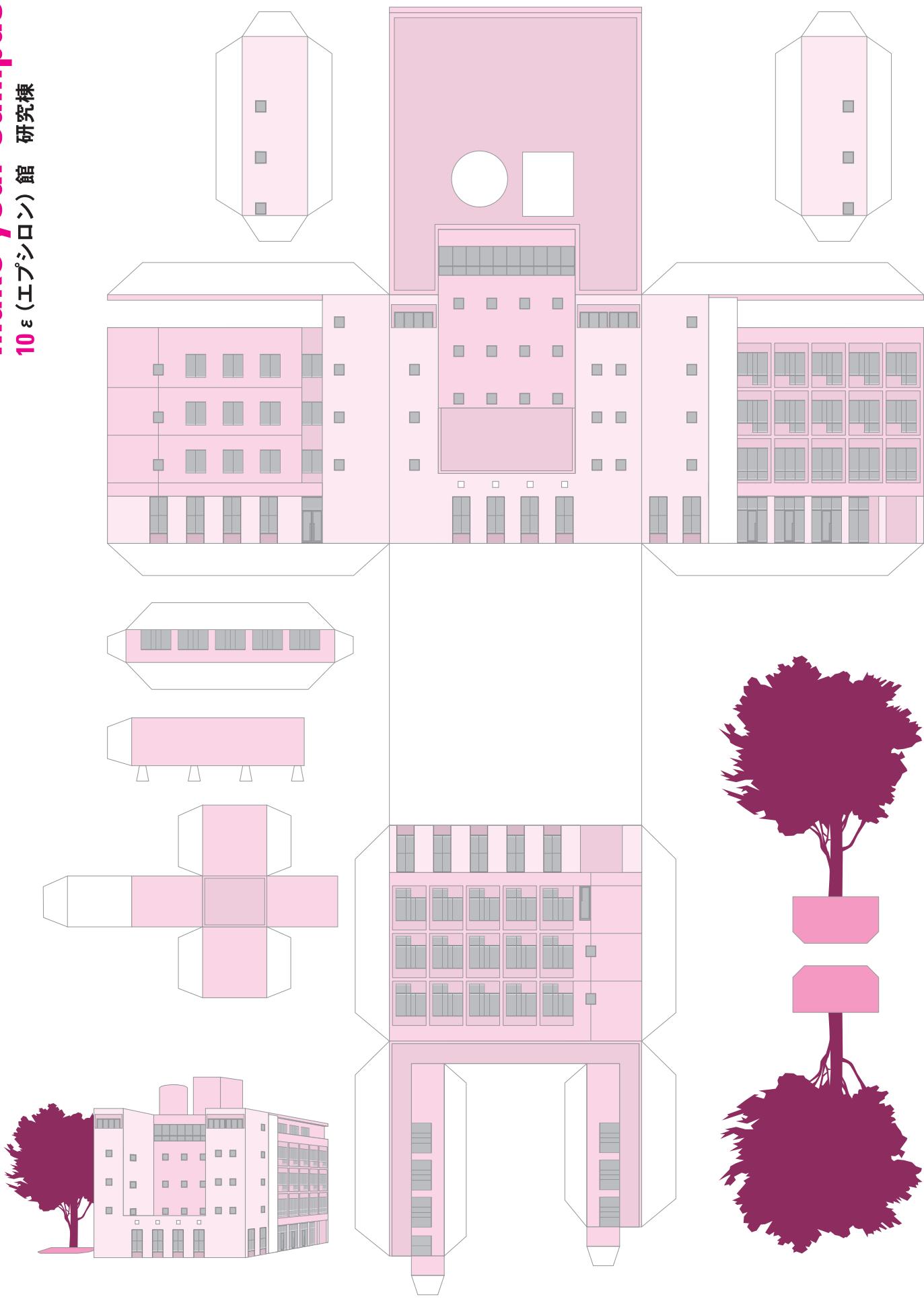
雑誌記事の編集・レイアウト・校正・写真に興味のある方、一緒にSFC REVIEWを作りませんか？

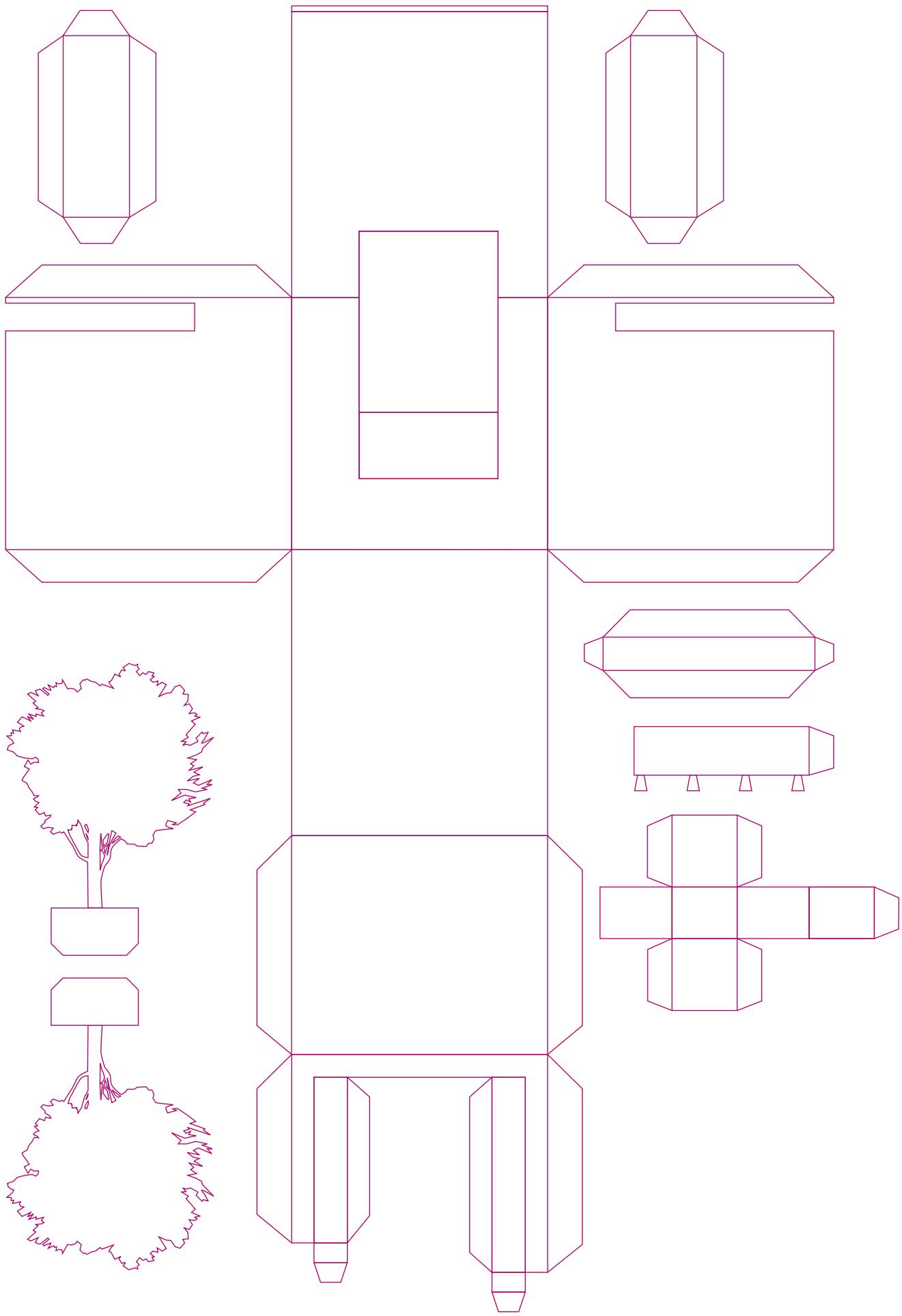
URL▶<http://sfcreview.sfc.keio.ac.jp/>

連絡先▶gakkai@sfc.keio.ac.jp

make your campus

10^ε(エプシロン)館 研究棟





KEIO
SFC
REVIEW

▷ No.20 ◁
[Special Edition]

湘南藤沢学会
2004.02.01